

人文会 ニュース

jinbunkai news

December 2024

NO. 148

1
15分で読む

何と出会ったのか、いくつかの回想

——百歳のドゥルーズに

宇野邦一

16
図書館レポート

図書館における読書バリアフリーの現在地

——公立図書館を中心に

野口武悟

2024年グループ訪問報告

2024年秋季研修旅行報告



www.jinbunkai.com

法政大学出版局

https://www.h-up.com/

《サビエンティア 73》

出版帝国の戦争

不運なものたちの文化史

高榮蘭 著

植民地の人々にとって日本語は抑圧する言語であり、抵抗の思想を学ぶ言語であり、娯楽のための言語でもあった。発禁本や大衆雑誌など読者と出版社の動きを考究する。

3520円

《叢書・ユニベルシタス 1174》

近代世界における死

トニー・ウォルター 著・堀江宗正 訳

近現代人は死の過程や悲嘆にどう対処してきたか。国際的に著名な死生学者が、各国の文化や歴史、法律や制度による違いを考慮しつつ総合的に調査した集大成の書。

5500円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税込です

煩悶の青春時代からの全軌跡を独白

九楊自伝

未知への歩行

石川九楊

*四六判上製カバ1 386頁 税込3080円

〈花〉の構造

日本文化の基層

*四六判上製カバ1 232頁

税込2200円 *2刷

思想をよむ、人をよむ、
時代をよむ。

書ほど
やさしいものはない

*四六判美装カバ1 322頁 税込2750円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込/宅配可

痛み、人間のすべてにつながらる

ライマン 痛みとの関係を変える秀逸な科学読み物。痛がるのは脳であり、それは飼いやらない！ 塩崎香織訳 3500円

恐怖と自由

ジニアス・シネラーのリベラリズム論と21世紀の民主制

ミユラー リベラリズムへの批判とリベラリズムの自虐の迷走を整理。シユクラー「恐怖のリベラリズム」併録。古川高子訳 4860円

鋼の王国 プロイセン [全2巻]

クラーク プロイセン三五〇年の全貌を初めて明らかに。ヨーロッパ史理解の必読書。小原淳訳 ①5980円 ②6600円

静かな基隆港

埠頭労働者たちの昼と夜

魏明毅 台湾北部の港街を舞台にグローバル資本主義の拡大を背景とした港湾労働者の盛衰を描く。黒羽夏彦訳 3500円

みすず書房 (税込)

東京文京本郷2-20-7 www.ms.z.co.jp

日本ファッションの二五〇年

平芳裕子 著

明治から現代まで

2090円

大礼服、モボ・モガ、モンペ、竹の子族、ポディコン、コギヤル…。模倣から始まり、独自の文化に発展した軌跡をたどる。

妖怪を名づける

鬼魅の名は (2刷)

香川雅信 著 ああ妖怪は芭蕉が名づけ親!? 江戸のSNS 俳諧が生んだ妖怪パブル。「歴史文化ライブラリー」1980円

歴史手帳

2025年版

「歴史百科Web」始動!

日記と歴史百科が一冊で便利。新機能や変更点を加え、多彩なコンテンツが閲覧可能に。プレゼントキャンペーン実施中。

吉川弘文館 編集部編 1430円

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2-8
☎ 03-3813-9151 税込

何と出会ったのか、いくつかの回想

——百歳のドゥルーズに

1 回想

ドゥルーズの思想と講義に出会った頃の状況を回想してみよう。ドゥルーズが現れ、読まれるようになった情況と脈絡の一端を少し振り返って、一つの思想と歴史の交点、断面、その混沌のイメージが浮かび上がるといい。もちろんそれは私という一個のモナドのなかの曲面に写った表象の渦にすぎない。読者のためにはそれを整理して語らなければならぬが、いくら書いても整理しきれなかった。あの「砂の本」(ボルヘス)のように、次々別の問題を記した新しいページが流出する。この頭

脳が出来なガラクタなのか、世界があまりに混沌としているからか、それとも両方のせいかな。このこと自体も考え出すと、果てしない問いとなる。

宇野 邦一 (フランス文学・思想研究)

それは一九七〇年代のことである。遅れて入った大学では、まず『資本論』を読まなければどうにもならないと心に決めて、その夏休みに酷暑の部屋で読み進んだ。その頃は吉本隆明やサルトルから、この社会そして世界の全体を思考しようとする弁証法の発想を切実に受けとっていたが、あとから思うと、その包括性や否定性になじめないでいた。ルカーチのように、一徹にマルクス主義にしたがって文学を研究する立場も気にかけていたが、フランスの詩人やシュールレアリスムを読み続けた

から、マルクスとその周辺の思想を読み、一方で文学作品の読み方を手探りして、一つの詩学のような認識をめざしていた。しかし焦点が定まらないままフランスに留学することになった。

マルクス主義や弁証法思想の様々なヴァージョンが現れると同時に、あの時代には、言語理論、記号論、テクスト理論、物語論が、ひとつの新たな潮流を形成していた。この潮流の源のひとつはロシア・フォルマリズムであり、決してマルクス主義と無縁ではありえなかったが、フォルマリズムはロシア革命以前の抽象芸術や詩の実験の果敢な動きとも関係していたから、マルクス主義に對抗する潮流のようにも感じられた。〈言語のフォルム〉を研究することで、世界の見えない構造が解き明かされるかもしれない、というような予感があった。こういう傾向の間で彷徨しながら、フランスで書いた私の修士論文では、「ランボーと都市」というテーマで、十九世紀の尖鋭な詩の実験とユートピア的な都市共同体のイメージを結びつけようとした。そういう時期に通っていたパリ第八大学でドゥルーズの講義を聴くようになったのである。

ランボーの後に集中的に読みこもうとしたのはアントナン・アルトーの全集だったが、『アンチ・オイディプス』でアルトーをとり上げていたドゥルーズ・ガタリのその後の展開に、講義を通じて触れられたのは幸運だった。ドゥルーズの本には、マルクスとアルトーがまるで隣人のようにとり上げられ、欲望機械と資本主義の結合に対する大胆な考察とともに、言語・記号の理論に対しても未知の角度からの問題提起があった。私のなかで分裂した形でひしめいていた異なる思想的課題が一度解体され、新たに、ゆるやかに結びついていくことになった。

ドゥルーズとガタリが二つの大著の間に書いた『カフカ』と、『千のプラトー』の序章となる『リズム』という小さな本からやってきた刺激は、まったく例外的なものだった。私のなかにあった思想や文学のかけらの間隙を、突風がかけぬけていったようだ。そこには思想の未知の生氣、リズム、音調、そして躍動する概念、語彙があった。彼らのカフカの読み方には、社会体制と言語表現の体制を爽快に貫通する思考があった。その頃も、ロラン・バルトを読んだりして、ランボーについて書くために詩学やテクスト理論を吸収しながら鮮明な方向を

見いだせないでいた私の思考の空洞に吹き込んできた突風だった。

2 指令語・プラグマティスム

そこでさしあたって、その頃私がドゥルーズのなかに発見した〈言語の思想〉を点検してみようと思うのだが、決してそれは体系的に述べられたものではなかった。そもそもドゥルーズの著作には一貫して、ある〈言語^{ロゴス}嫌悪〉のようなものが見える。奇妙なことなのだ。ある意味で哲学の課題とは、世界を抽象し論理的に思考する言語を凡例のように提供することのはずである。

例えば二巻からなる『シネマ』で、彼は映画のイメージⅡ記号の研究を試みたが、何度か強調しているのは、その記号論は決して〈言語をモデルにしない〉ことである。記号学が〈言語をモデルとする〉学であるならば、彼の探求は決して記号学ではなく、記号論であり、それはむしろ言語への抵抗でもあるかのように進められた。ドゥルーズにとって注目すべき作家たちは、単に言語使用において〈どもる〉のではなく、むしろ〈言語を

どもらせる〉のである。言語の明晰な分節と意味作用そのものに対する懐疑や抵抗を、たびたび彼は顕著に示した。映画論における彼の喫緊の課題は、決して言語を排除するものではないにしても、むしろ言語の外部にあるイメージ記号の運動、時間、生について語ることだったのだ。哲学の姿勢、方法という点から見ても、この〈言語への抵抗〉はかなり異様だと言える。

もうひとつ顕著な側面は、言語に関する〈プラグマティスム〉という側面である。それを鮮明に示しているのは、『千のプラトー』、「言語学の公準」の章に書かれた「指令語」の考察である。言語は命令する。「火事だ」という言表は、出来事の報告であるよりも、「逃げろ」とか「火を消せ」とかの「命令」を意味する。意味する以上に、命令するのだ。「あなたを愛している」は「私を愛しなさい」という懇願、したがって命令である。「言語行為論」の先駆者J・L・オースティンは、「私は誓う」、「私は賭ける」のような発話について、発話そのものが「誓う」、「賭ける」などの行為にほかならないこと（遂行的発話）を指摘して、すでに言語のプラグマティスムを提案していたことになる。

しかしドゥルーズ・ガタリの指摘は、それをさらに尖鋭にし、全般化している。単に一つの発話の裏にしかしかの命令が潜んでいるというふうには、意味を解釈しているのではない。ひとつの発話は行為をうながし、こうして他者に作用しようとし、現に作用する。その意味で発話は力を行使する。そのような力の行使の広大な組織網が形成されている。それは言語の政治(学)にも直結する見方である。言語の教育そのものが、言語の正しい規則と使用を強制することで、ある力関係の教育になる。文法や意味は、そのための手段である。

この批判的思考は、言語の〈外部〉に付随するものにはすぎないかに見える〈命令〉や〈力関係〉を、むしろ言語に内在する本質として提案していた。誰にでも受け入れられる考えではない。オースティンの言語行為論は、語ることが単に記述することではなく、行為そのものであるような例を指摘したことで、ある種の認識に道を開いた。「言明の真偽は言葉の意味だけに依拠するものではなく、どんな状況で、どんな行為が行われていたかにも依拠するものなのだ」「言語と行為」飯野勝己訳、講談社学術文庫、225頁、「遂行的発話」ということで、私

たちは発話の発語内の力にできるかぎり寄り添っていて、事実との対応という次元を抽象している。(同、226頁)。この「発語内の力」という指摘は無視できない。

ドゥルーズの修行時代の哲学史的モノグラフィイーのなかには、ヒューム論(「経験論と主体性」)が入っていた。イギリス経験論の粹とも言える思考に触発されたドゥルーズのプラグマティスムは「一筋縄」ではない。しかし言語学をモデルにして、とりわけ言語の形相、形式面を考察しながら記号学にまで拡張してきた人文学の潮流に、ドゥルーズは与することはなかった。むしろ言語を通じて作用する力関係や、力の知覚のほうに思考を集中させ、命令の連鎖としての言語(指令語)に注意をうながして、まっすぐに言語の権力作用(「力への意志」)を考察する道を開こうとした。極端で、飛躍的な思考だが、この転換から鮮烈な衝撃を受けた。同じ意味をもつかに見える文も、異なる力関係の場で発話されるときには、異なる作用を機動させる。そして言葉は細部にいたるまで、そのような力関係の構成要素になっている。それはむしろ「社会言語学」の課題だろう、というような反論はここでは無効である。社会という力関係とまったく無縁に

構成され、強制され、習得される言語はありえない。

しかし言語は〈意味する〉のではなく〈命令する〉というこの提案は、決して言語を命令に還元しようとするものではない。実は言語を規定している〈外部〉をじかに〈内部〉に貫入させる提案なので、問題はむしろ複雑化し錯綜する(リズム化、多数多様化)。果てしない混沌、混沌に迷い込むだけだと危惧させられるのも当然だ。還元されるどころか、果てしない多様体が描かれる。ガタリが縦横無尽に拡大していった混沌の図は、『分裂分析的地図作成法』に見られるように、たえず作り直される概念の果てしない絡みあいになる。ドゥルーズのほうが、その混沌の増殖を巧みに制御し調律することができた。そのみごとに成果が『千のプラトー』だったのだ。果てしない混沌は、有限数のモデルに結晶させられている。混沌のなかにある微細な要素の配列をさぐり、そのたびに異なる配列をモデル化した二人の思索の成果である。リズム／樹木、分子状／モル状、戦争機械／国家装置、平滑空間／条理空間、等々の重複とずれから多数多様のモデルが、次々くりだされた。

3 非身体的変形、表現と内容

しかし、もう少し〈言語の思想〉にこだわってみよう。命令する発話(指令語)は、確かに一定の効果、変化、行動をもたらず。『千のプラトー』の「言語の公準」の章で、この「指令語」の作用は、やがて「非身体的変形」と言い換えられている。つまり言語という非身体的、非物体的なものが、身体または物体に作用するのだが、これは不可解なことである。言語で生起していることは、あくまで言語の次元での出来事であり、身体や物体のあいだの因果関係的な作用は、あくまで物の次元での出来事である。言語と身体という異質な次元のあいだに因果関係が生じるはずはない。しかし、もちろんこれは非常識な推論であって、多くの場合、「立て」、「座れ」と命じられた人間は、自分の身体を立たせたり、座らせたりすることができる。脳はそのような命令を解釈し、いやでも身体にそれを実行させることができる。逆にそれに反対する命令を自分自身にくだすこともできる。脳は、言語と身体を連結する魔法の機械である。

ドゥルーズは、唯一の言語哲学的思索を試みた書物『意味の論理学』では、ストア派とルイス・キャロルを参照しながら、言語とその意味の次元を、身体から原理的に分離された〈表層〉、〈出来事〉の次元としてとらえていた。ガタリとの共著以前に書かれたこの本のほうを高く評価して、共著のほうを無視しようとする読者も多い(その代表的なひとりスラヴォイ・ジジェックか)。しかしドゥルーズは、この言語―表層―出来事の思索を決して忘れることなく、特に『カフカ』と『千のプラトール』では、それをふまえて言語と身体の関係、干渉、結合と切斷、加速と減速等々を、さらに力動的に考察している。

言語は様々な記号にまで拡張されて「表現」と呼ばれ、表現によって指示される「内容」と対比される。「表現」と「内容」はたがいに独立しているが、独立することによって二つは一つのアレンジメントを構成する。「表現」は単に言葉に、「内容」は単に「物」や「身体」の集合に還元されるのではなく、「表現」は様々な言語・記号・情報・知識・身振り・表情のアレンジメントを形成し、「内容」もまた様々な財・道具・機械・物質・身体を混合するアレンジメントを形成する。実は一つの巨

大なアレンジメントが「表現」と「内容」という二つのアレンジメントをそなえ、二つのあいだには、たえず相互的な前提や、挿入や、干渉が起きている。それは下部構造が上部構造を決定し、上部構造が下部構造を指示するとか、反映するとか、表象するとかいったマクロな静的決定ではない。

つまり「非身体的変形」と呼ばれる言語・記号の作用は、もはや単なる命令の連鎖にとどまらず、言語・記号からなる表現の巨大なアレンジメントと、それと連動する物と身体の巨大なアレンジメントのたえまない干渉・変形のなかで起きる作用として考えられている。「もろもろの表現または被表現は内容のなかに、挿入され、介入して、もろもろの内容を表象するのではなく、それらを予感し、それらに逆行し、それらを緩慢にしたり、または加速したり、分離したり、または結合したり、あるいは切斷したりする」。「表現の形式と内容の形式の独立性は、〔……〕記号が物自身に働きかけると同時に、物が記号を通じて拡張し、展開していく仕方を確立するのだ」。「一つの言表行為のアレンジメントは、物に「ついて」話すのではなく、物の状態または内容の状態にじか

に話すのだ」(『千のプラトール』上、河出文庫、185頁)。表現は単に内容を表現するのではなく、表現と内容の間にたえず様々な干渉が起きる。とりわけ表現の形式の変化や解体は、内容の形式に作用しうる。そして内容にも変化がもたらされる(その意味で形式の変化は「革命的」でさえありうる)。言葉と身体の間が発する瞬時の変化は、まず命令と名づけられ、ついで非身体的変形と命名されたが、実はほとんど名づけようのない介入や効果や作用がたえず起きていて、変形作用は身体(そして物体)にだけではなく、名前と、名づけられるものとの関係にまで及ぶのである。

そもそも言語・記号のアレンジメント自体が、たえず編成を変えて、歴史のなかで新たな体制を形成する。ドゥルーズとガタリは、その「歴史」を、「記号の体制」の章で試みているが、あくまで実験的、仮説的な試みである。たとえば言語学の提案した「シニフィアン」という概念は精神分析をはじめ、様々な領域で大きな意味をもつようになったが、シニフィアンがそのような地位をもちうる「記号の体制」は、歴史の一時期に、ある文脈のなかで成立するものにすぎない。たとえば別の体制で

は、「言語」の運用を支える「主体」あるいは「主体性」に光が与えられる。そのように「主体化」を中心におくような「記号の体制」が形成されたのである。しかしすでに時代錯誤かもしれない「記号の体制」が根強く、保存され、あるいは復活し、他の体制に混入する。新たな情報技術が浸透した現代社会に対応する「記号の体制」と、そこに忍び込み寄生する体制も、確かにあるにちがいない。

フーコーの『言葉と物』は、「類似」や「表象」を原理とする一時代の認識の体制(エピステーメ)を照らし出していた。フーコーを大いに評価していたドゥルーズは、「記号の体制」論によって、もうひとつの「言葉と物」論を暗示していたかもしれないが、むしろ『千のプラトール』の全体は、同時に言葉論であり、物論である。壮大な世界論を提出しているのだ。ドゥルーズがその後に行った、もうひとつの壮大な「記号のアレンジメント」の研究は、二巻からなる『シネマ』つまり映画における記号の新たなアレンジメントだったのである。記号学が諸領域に盛んに応用され普及されるなかで、当然ながら映画の記号学的研究さえも様々に試みられてきた

が、ドゥルーズは言語学から示唆を受けた記号学の発想には決して与さない。言語のモデルにしたがう記号学ではなく、映画の「記号論」は、少なくとも、図像、指標象徴（バースの提案に分類される記号の全体を考察する。むしろ非言語的次元に大きく開放された記号のアレンジメントとして映画の「イマージュ」を研究する。

『意味の論理学』では、言語は命題でも、表象でも、表出でも、意味作用でもないと言われて、言語自体のあらゆる常識的な実質が骨抜きにされた。それは経験的に知られて広く共有されてきた言語の認識を、まったく逆なでする提案だった。フィツジェラルド、マルコム・ラウリーにふれながら、アルコール中毒の「超越論的」分析を行った章「磁気と火山」が素晴らしい。経験的認識の外にあるという意味で、言語は「超越論的な」次元に還元されたが、その超越論的反言語論は、ガタリとの共同作業を経て、錯綜した記号の巨大なアレンジメントのほうに言語の思考を開き、ついに映画のイメージ論に至った。

ドゥルーズとの出会いによって、マルクスの問題と、記号論や詩学のあいだで分裂していた思考を、なんとか

私はたてなおすことができたようだ。実は、真正面から分裂症をあつかった分裂的な思考に出会って、それ以上に分裂を深めていたかもしれない。あの頃私は、アルトーとドゥルーズを同時に読み進めることによって、目覚ましい分裂に耐えうる思考をなんとか仮設し続けたかもしれない。

4 回想II

哲学の成立が、古代ギリシアのポリスと深くかわっていたことを見ても、哲学と政治学は切り離して考えることができない。という正論をにらんで、ドゥルーズの思想における政治について、いま適確に語るることができるかどうか。とにかく語らずにはすまされない。私自身のドゥルーズの読み方の来歴を、〈言語思想〉との関連で振り返ってきたが、すでに指令語や非身体的変形、そして表現と内容のあいだの多様な干渉は、様々な政治的抗争の場としての言語、記号、そして思考の戦場を浮かび上がらせる。

ドゥルーズ（とガタリ）が広く読まれ始めた時期（ほぼ

一九八〇年以後)の日本では、それに触発された著作や解説書の与えたイメージもあって、それはむしろ従来の政治思想の重たい雰囲気を払拭する思想として受けとられた。(ポストモダン)という言葉とともに、マルクス主義や実存主義の重厚な問いが払拭されたかのようで、それゆえ多くの知識人からの抵抗にも出会った。実は(近代以降)という深遠な問いを示すはずの用語が、それほど軽々しく扱われたのは、モダンのせいか、ポストモダンのせいなのか。『アンチ・オイディプス』、『千のプラトール』の日本語訳が出る前に解説書のほうが流布して、原著をつらぬく政治的文脈の深さが読みとられなかったことは、長いあいだ影響した。徐々にそれは修正されて政治運動に対しても反響が広がり、むしろガタリの著書から、政治学的観点の理解も拡大していった。

そして当時は、ドゥルーズの紹介者たちの多くが、哲学の門外漢であることも目立っていた。大学でドゥルーズについて学術論文を書くことは難しく、悩みながら私のところに相談にきた他大学の学生は少なくなかった。いつしかその情況は変わり、書物になったドゥルーズの博士論文の数はもう数知れない。するとここに書く

までもないことが起きた。アカデミズムの外部に出ようとした思想のアカデミズム化である。かつてドゥルーズの特異性を敏感に伝えようとした論やエッセーは、しばしば「文学的」と呼ばれ、哲学史をわきまえた厳密な学究的態度が主張されるようになった。これは「進歩」なのか、「退行」なのか。たぶん両方だ。「ポストモダン」、「文学的」、「政治的」、そしてそのあとには「哲学(史)的……」。こんなことを書くこと自体にもうんざりするが、書いておかねばならない。

オアシスのあとに砂漠にふみこんだ。しかし最初から砂漠しか見えないとすれば……。すでに同時代に対して、ドゥルーズがこう漏らしていたのを思い出す。しかし晩年のドゥルーズの深いペシミズムは、もちろん哲学のアカデミズムよりももっと深いところにむけられていた。

《ドゥルーズと政治》にもどろう。二人の共著『カフカ』は、「マイノリティ」という言葉に異様な生氣をふきこんでいた、それは端的にチェコのユダヤ人のことであり、チェコ語、ドイツ語、イディッシュ語の使用されるプラハで、奇妙に乾いたドイツ語で書いたカフカの状況のことであり、おびただしい恋の手紙を書いては婚

約を破棄する独身の法律家であり、作品のなかでは虫に変身したグレゴール、不可解な訴訟の被告になるKであり、そこにマイナー性は何重にも折りたたまれていく。ひとつの徹底したマイナー政治学がそこに読みとれる。カフカ文学は、決して正体をあらわにしない非情な官僚制を告発したばかりか、ファッション、強制収容所を予感しながら書いたという意味で政治的である。「万里の長城」や『審判』で、異なるタイプの権力の建築（構造）を描いたという点でも政治的である。様々な表現（言語・書類・記号・写真・肖像・音楽）と内容（役所・法廷・汽船・ホテル・建築）の間で構成され変形されるアレンジメントにおいて、不断に続行される抗争を見つめたという点で、さらにミクロ政治学的である。

5 回想Ⅲ

もう最近のことではないけれど、「あれほど一貫して生を肯定する哲学を語った哲学者が、なぜ自殺したのか」。そういう問いを私にむけてきた人たちは少なくな。愚かな問いを愚かと断定する愚かさの自由を行使さ

せてもらいたい。ドゥルーズの生の肯定が、どんな生を、どんなふうに肯定したのか、そのことを読まずに、そんな問いをたてることに意味があるとも思えない。

生の肯定は、死の否定に直結するわけではない。生と死は対立概念でありうるが、生が死ぬのであり、生は死につつまえるものでもある。「私は生きることを選んでいる」と思っていたが、死ぬことを学んでいた（ダ・ヴィンチの手帳の言葉）。死が生を否定するわけではない。生を肯定する思考は、生を否定する生に対する闘いであって、死と闘うわけではない。

さらに愚劣と思わされたのは、「ポストモダンのニヒリズムゆえに、彼は自殺に及んだのである」という、当時のメディアに出た決めつけである。「ニヒリズム」についてのおぞましい安直な理解にも呆れかえった。しかし私の反発のほうが正しかったわけではない。そのような問いや意見を思いつく理由が、私の中になかっただけである。

確かに『哲学とは何か』は、静謐な老年の語り口ではじまりながらも、『判断力批判』を引き合いに出して、『解き放たれて猛り狂った作品』という面をカントと共

有するかのように進んでいる。いたるところでドゥルーズは、〈同時代〉の〈砂漠〉について激しい批判、怒り、あるいは絶望さえも表現しているが、もちろん最後までユーモアも、友愛とユートピアの思考も失ってはいなかった。

席巻する「マーケティング」による「哲学の横領」について語り、「マジヨリテイ」そのものと化した「民主主義」に、「もろもろの民主主義と共存する強大な警察と軍隊」に、その背後に君臨する「市場」に批判を広げ、さらには「人間であることの恥」(プリモ・レヴィ)にまで言及し、それは猛り狂った弾劾の調子に高まっている。二〇世紀末には、ドゥルーズがガタリとともに提示した鋭利で遠大な批判のパスpekテイヴにとっても、もはや扱いきれない新たな暴力と統制が始まっていたということなのか。そうだとすれば、なおさら、その到来をまざまざと予感しながら試みた強靱な抵抗の軌跡を忘れるわけにはいかないのだ。

付録

この文章でふれてきた書物を中心に、即興的な読書案内を試みる。

ドゥルーズとガタリの書物は膨大にあり、『アンチ・オイディプス』と『千のプラトール』にぜひ挑戦してもらいたい。二つの内容をコンパクトに表現している『カフカ』、そして『千のプラトール』(河出文庫、上巻)に含まれる「リゾーム」、「いかにして器官なき身体を獲得するか」の章をしっかりと吸収することからはじめてはどうだろう。これらを読んでドゥルーズの思考のスタイルに少し慣れてきたら、『批評と臨床』、『ドゥルーズ・コレクシオン』Ⅰ・Ⅱには、それほど長くは重要なエッセーが数々含まれているので、それを熟読するとい。

ドゥルーズ自身が再評価に貢献した哲学者たちは、スピノザ、ヒューム、ニーチェ、ベルクソンをはじめ数々いる。彼らの主著はここあげるまでもない。ドゥルーズがこの四人について書いた入門的な小著と、かなり手ごわい『ニーチェと哲学』、『スピノザと表現の問題』がある。『スピノザ 実践の哲学』のほうを、私は大学の授業でよく取り上げた。

入門書や概説書から読み始めることには賛成しない。ドゥルーズについて要約的な知識だけをもって、あまり意味がないと思ってきたからだ。よくわからなくても、もちろん翻訳を通じてでも、〈本体〉に触れた感覚的把握のほうが重要だからである。代表的な概説書や学術論文は、あえてここで紹介するまでもない。あまり目立っていないもので、印象に刻まれているのは丹生谷貴志『死体は

窓から投げ捨てよ』、築地正明『わたしたちがこの世界を信じる理由——『シネマ』からのドゥルーズ入門』、堀千晶『ドゥルーズ思考の生熊学』など。

フランソワ・ドス『ドゥルーズとガタリ 交差的評伝』は、ドゥルーズの姿勢にはおよそ反する書物だが、ガタリとともに生きられた一時代の年代記であり、ときどき拾い読みをする。

やはりドゥルーズの本体にもどると、『フリーコー』、『ザッヘル＝マゾッホ紹介』、『ブルーストとシーニユ』、『フランシス・ベーコン』などは、ドゥルーズの体質で闊達に書かれた作家論として、読まなければ損、といたい貴重なエッセーである。

アンドレイ・ペールイ『ペテルブルク』、マルカム・ラウリー『火山の下』、ヴィトルト・ゴンブロヴィッチ『ボルノグラフィア』、『コスモス』などの小説は、ドゥルーズの書いた数行に促されて読むことになった。

それ以上に、ドゥルーズの思考の本体に深く組み込まれた文学はアルトール・ベケット、メルヴィル、もちろんブルーストである。上にあげた主要な哲学者とともに読まなければならない。この面に関して、『ドゥルーズ 千の文学』という論集があることも喚起しておこう。

シャルル・ベギー『クリオ』、ジョー・ブスケ『傷と出来事』は、ドゥルーズの「歴史」、「出来事」の考察にかかわる重要な書物。詩では、ゲラシム・ルカ、マンデリシュタム、わざわざあげる必要もないランボオ、そしてポブ・ディランからの引用さえある。

遺書とも言える最後のエッセー「内在——一つの生……」（『ドゥ

ルーズ・コレクション』に引かれていたメーヌ・ド・ピラン、ディケンズ（『我らが共通の友』）、日本では怪奇小説家に分類されているレルネット・ホレーニア。ドゥルーズが他ではほとんど言及していない著者たちだ。怪奇小説といえ、ラヴクラフトを知ったのも『千のプラトー』のなかでのことだった。ドゥルーズのこういう著者たちの意外な読み方にも、注意をむけるといい。

宇野 邦一（うの くにいち）

一九四八年生まれ。パリ第八大学哲学博士。立教大学名誉教授。専門は、フランス文学・思想、映像身体論。主な著書として、『アルトール 思考と身体』（白水社）、『ドゥルーズ 流動の哲学（増補改訂）』『反歴史論』（講談社学術文庫）、『非有機的生』（講談社選書メチエ）、『パガニスム 異教者のエティカ』（青土社）ほか。主な訳書として、アントナン・アルトール『神の裁きと訣別するため』『タラウマラ』（河出文庫）、ジル・ドゥルーズ『フランシス・ベーコン 感覚の論理学』（河出書房新社）、『ブルーストとシーニユ（新訳）』（法政大学出版局）、ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス——資本主義と分裂症』（河出文庫）、『カフカ——マイナー文学のために（新訳）』（法政大学出版局）、アシル・ムベンベ『黒人理性批判』（講談社選書メチエ）ほか。

15分で読む ドゥルーズ ブックガイド

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
河出文庫	上4309462806 下4309462813	アンチ・オイディプス——資本主義と分裂症(上・下)	ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ著／宇野邦一訳	上1250 下1200	2006
法政大学出版局	4588010682	カフカ——マイナー文学のために〈新訳〉	ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ著／宇野邦一訳	2700	2017
河出文庫	上4309463421 中4309463438 下4309463452	千のプラトール——資本主義と分裂症(上・中・下)	ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ著／宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明訳	各1300	2010
朝日出版社	4255870199	リズム……序	ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ著／豊崎光一訳・編	品切れ	1987
法政大学出版局	4588008559	シネマ1＊運動イメージ	ジル・ドゥルーズ著、財津理・齋藤範訳	4500	2008
法政大学出版局	4588008566	シネマ2＊時間イメージ	ジル・ドゥルーズ著、宇野邦一・石原陽一郎・江澤健一郎・大原理志・岡村民夫訳	4700	2006
講談社学術文庫	4065143131	言語と行為——いかにして言葉でものごとを行うか	J. L. オースティン著、飯野勝己訳	1280	2019
河出書房新社	4309242231	経験論と主体性——ヒュームにおける人間的自然についての試論	ジル・ドゥルーズ著、木田元・財津理訳	品切れ	2000
紀伊國屋書店	4314008143	分裂分析的地図作成法	フェリックス・ガタリ著／宇波彰・吉沢順訳	品切れ	1998
法政大学出版局	4588002199	意味の論理学	ジル・ドゥルーズ著、岡田弘・宇波彰訳	4800	1987
河出文庫	上4309462851 下4309462868	意味の論理学(上・下)	ジル・ドゥルーズ著、小泉義之訳	各1150	2007
新潮社	4105067083	言葉と物——人文科学の考古学〈新装版〉	ミシェル・フーコー著、渡辺一民・佐々木明訳	5000	2020
岩波文庫	4003243824	審判	カフカ作、辻理訳	1050	1966
河出文庫	4309463759	哲学とは何か	ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ著／財津理訳	1400	2012
岩波文庫	上4003362570 下4003362587	判断力批判(上・下)	カント著、篠田英雄訳	上970 下1160	1964

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
東京大学出版会	4130160506	判断力批判 第一部 訳と詳解	イマヌエル・カント著、小田部胤久訳	8600	2024
光文社 古典新訳文庫	上4334100452 下4334100469	判断力批判(上・下)	カント著、中山元訳	各1400	2023
河出文庫	4309463339	批評と臨床	ジル・ドゥルーズ著、守中高明・谷昌親訳	1300	2010
河出文庫	I 4309464091 II 4309464107	ドゥルーズ・コレクション I 哲学 II 権力／芸術	ジル・ドゥルーズ著、宇野邦一監修	各1300	2015
ちくま学芸文庫	④4480080745 ①④480080813 ②④480080820 ③④480080837	ニーチェ全集 ④反時代的考察 ①①善悪の彼岸 道徳の系譜 ②②権力への意志(上) ③③権力への意志(下)	フリードリッヒ・ニーチェ著／④小倉志祥訳、①信太正三訳、②原佑訳、③原佑訳	④1800 ①①900 ②②1700 ③③1900	1993
法政大学出版局	4588010637	ベルクソニズム〈新訳〉	ジル・ドゥルーズ著、楢垣立哉・小林卓也訳	2100	2017
河出文庫	4309463100	ニーチェと哲学	ジル・ドゥルーズ著、江川隆男訳	1400	2008
法政大学出版局	4588099786	スピノザと表現の問題〈新装版〉	ジル・ドゥルーズ著、工藤喜作・小柴康子・小谷晴勇訳	5000	2014
平凡社ライブラリー	4582764406	スピノザ 実践の哲学	ジル・ドゥルーズ著、鈴木雅大訳	1300	2002
河出書房新社	4309241814	死体は窓から投げ捨てよ	丹生谷貴志	品切れ	1996
河出書房新社	4309249360	わたしたちがこの世界を信じる理由——『シネマ』からのドゥルーズ入門	築地正明	2700	2019
月曜社	4865031553	ドゥルーズ 思考の生態学	堀千晶	3200	2022
河出書房新社	4309231587	ドゥルーズとガタリ 交差的評伝	フランソワ・ドス著、杉村昌昭訳	9000	2024
河出文庫	4309462943	フーコー	ジル・ドゥルーズ著、宇野邦一訳	1300	2007
河出文庫	4309464619	ザッヘル＝マゾッホ紹介——冷淡なものと残酷なもの	ジル・ドゥルーズ著、堀千晶訳	1000	2018
法政大学出版局	4588011276	ブルーストとシーニュ〈新訳〉	ジル・ドゥルーズ著、宇野邦一訳	3000	2021
河出書房新社	4309231204	フランシス・ベーコン 感覚の論理学	ジル・ドゥルーズ著、宇野邦一訳	3200	2022
講談社文芸文庫	上4061976917 下4061976962	ペテルブルク(上・下)	アンドレイ・ペールイ著、川端香男里訳	上下とも品切れ	上1999 下2000

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
白水社	4560093498	火山の下	マルカム・ラウリー著 ／斎藤兆史監訳、 渡辺暁・山崎暁子 訳	3800	2023
河出書房新社	4309201375	ボルノグラフィア	ヴィトルド・ゴンブロ ヴィッチ著、工藤 幸雄訳	品切れ	1989
恒文社	4770402141	コスモス	ヴィトルド・ゴンブロ ヴィッチ著、工藤 幸雄訳	品切れ	1990
せりか書房	4796703000	ドゥルーズ 千の文学	宇野邦一・堀千晶・ 芳川泰久編	4800	2011
河出書房新社	4309619965	クリオ——歴史と異教的魂の 対話	シャルル・ベギー著、 宮林寛訳	3200	2019
河出書房新社	4309206271	傷と出来事	ジョー・ブスケ著、 谷口清彦・右崎有 希訳	品切れ	2013
ちくま文庫	上4480032164 下4480032188	我らが共通の友(上・下)	チャールズ・ディケン ズ著、間二郎訳	品切れ	1997

図書館における読書バリアフリーの現在地

—— 公立図書館を中心に

野口 武悟(専修大学文学部教授)

解決急がれる「本の飢餓」

「読書バリアフリー法」(視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律)が制定されてから2024年で5年が過ぎた。5年前よりも、読書バリアフリーへの関心は格段に高まっているように感じる。

2024年4月、日本文藝家協会、日本推理作家協会、日本ペンクラブの文芸3団体が「読書バリアフリーに関する三団体共同声明」を発表した。また、2024年7月には、日本書籍出版協会、日本雑誌協会、デジタル出版者連盟、日本出版者協議会、版元ドットコムの出

版関連5団体も、「読書バリアフリーに関する共同声明」を発表している。ここには、「読書バリアフリー法」制定から5年という節目のみならず、2023年7月に市川沙央氏が『ハンチバック』(文藝春秋)で第169回芥川龍之介賞を受賞したことの影響が大きい。障害当事者である市川氏は、読書バリアフリーが進まないことへのいら立ちが『ハンチバック』執筆の動機になったと受賞時に語っている。

読書バリアフリーの推進は国際的なテーマでもある。その背景にあるのが、「本の飢餓」(Book famine)である。これは、視覚障害者等が自ら読めるアクセシブルな書籍等(点字図書、録音図書等)を入手できる割合が極めて低

いことを指す。世界盲人連合(WBU)によれば、その割合は、日本を含む先進諸国で7%程度、開発途上国では1%にも満たないと推定されている。そのため、各国の視覚障害者等は、アクセシブルな書籍等の「買う自由」と「借りる権利」を保障してほしいと声をあげ続けてきた。つまり、出版から図書館までをトータルにカバーした読書バリアフリーの取組みを求めているのである。

「本の飢餓」解消に向けての国際的な枠組みの1つに、世界的所有権機関(WIPO)が2013年に採択した「マラケシュ条約」(盲人、視覚障害者その他の印刷物の判読に障害のある者が発行された著作物を利用する機会を促進するためのマラケシュ条約)がある。この条約によって、条約締結国間でアクセシブルな書籍等のうち、各国の「著作権法」の権利制限規定(日本の場合は後述する「著作権法」第37条第3項)にもとづき視覚障害者等のために図書館で点訳者や音訳者等により複製されたものを交換(輸出入)できるようにになった。日本もこの条約の締結国の1つであり、2019年1月に発効した。

「読書バリアフリー法」の制定

「マラケシュ条約」のような国際的な枠組みづくりと同時に、各国でも「本の飢餓」解消に向けた法整備等が進められている。日本における「読書バリアフリー法」の制定もその1つであり、2019年6月のことだった。

全18条から成る「読書バリアフリー法」は、「障害の有無にかかわらず全ての国民が等しく読書を通じて文字・活字文化の恵沢を享受することができる社会の実現に寄与すること」を目的とする(第1条)。また、法律にいう「視覚障害者等」とは、「視覚障害、発達障害、肢体不自由その他の障害により、書籍(雑誌、新聞その他の刊行物を含む。)について、視覚による表現の認識が困難な者」を指し、視覚障害者だけに限定されているわけではない(第2条)(本稿における視覚障害者等もこの定義で用いている)。第3条で3つの基本理念を掲げ、第4条から第6条で国と地方公共団体の責務を示している。国に「読書バリアフリー基本計画」(視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する基本的な計画)策定を義務づけ(第7条)、地方公

共同体に「読書バリアフリー計画」（視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する計画）策定を努力義務としている（第8条）ことも特徴的である。第9条から第17条では出版と図書館に関わる9つの基本的施策を示している。最後の第18条では関係省庁や関係団体、当事者を交えた協議の場（関係者協議会）に関して規定している。

なお、「読書バリアフリー法」の施行に先立つ2019年1月には、すでに述べた「マラケシュ条約」発効と同時に、改正「著作権法」が施行された。これにより、図書館においては、視覚障害者等のために原本の著作権者に無許諾でアクセス可能な書籍等への複製と公衆送信が可能となった（第37条第3項）。

遅々とした地方公共団体による「読書バリアフリー計画」の策定

「読書バリアフリー法」第7条にもとづき、国は2020年7月に「読書バリアフリー基本計画」を策定・公表した。計画の期間は2024年度までの5年間であることから、現在、国の関係者協議会では第2次

計画の検討が進められている。

2020年に策定された計画の内容構成は、「Ⅰはじめに」「Ⅱ 基本的な方針」「Ⅲ 施策の方向性」「Ⅳ おわりに」となっている。このうち、「Ⅱ 基本的な方針」は同法第3条に示す基本理念をベースとしており、「アクセス可能な電子書籍等の普及及びアクセス可能な書籍の継続的な提供」「アクセス可能な書籍等の量的拡充・質の向上」「視覚障害者等の障害の種類・程度に応じた配慮」を掲げる。

また、「Ⅲ 施策の方向性」は同法第9条から第17条に示された基本的施策を具体化したものである。すなわち、「視覚障害者等による図書館の利用に係る体制の整備等」「インターネットを利用したサービスの提供体制の強化」「特定書籍・特定電子書籍等の製作の支援」「アクセス可能な電子書籍等の販売等の促進等」「外国からのアクセス可能な電子書籍等の入手のための環境整備」「端末機器等及びこれに関する情報の入手支援、情報通信技術の習得支援」「アクセス可能な電子書籍等・端末機器等に係る先端的技術等の研究開発の推進等」「製作人材・図書館サービス人材の育成等」である。

「読書バリアフリー法」第8条では、地方公共団体にも「読書バリアフリー計画」の策定を努力義務としているのだが、その策定はあまり進んでない。

文部科学省によって2024年2月1日現在で都道府県、政令市、中核市における計画の策定状況を調査した結果が公表されている。それによると、策定済の都道府県は19/47(40・4%)、政令市は3/20(15%)、中核市は11/62(17・7%)にとどまった。「策定する予定なし」は、都道府県では0だったものの、政令市で6/20(30%)、中核市に至っては36/62(58・1%)と6割近くにのぼった。これらの結果を見るに、中核市よりもさらに規模の小さな地方公共団体における状況については容易に推測できよう。

次に述べるように、公立図書館の読書バリアフリーの取組みには解決すべき課題も多い。とりわけ予算や職員の配置の充実を図るためにも、地方公共団体には実効性ある「読書バリアフリー計画」の策定を求めたい。「県が計画を作ってから考える」という市町村は多い。まずは47すべての都道府県による「読書バリアフリー計画」策定が望まれる。

図書館における読書バリアフリーの現状

では、日本の読書バリアフリーの現状はどうなっているのだろうか。すでに述べたように、出版から図書館までのトータルな読書バリアフリーの取組みを視覚障害者等は求めており、そのことは国の「読書バリアフリー基本計画」でも強く意識されている。

本節では、図書館における読書バリアフリーの現状について、詳しい調査データがある公立図書館に焦点を当てて見ていきたい。全国の公立図書館を対象とした読書バリアフリーの取組みに関する実態調査を全国公共図書館協議会が2021年に実施している(回答数1390館、回収率99・8%)。主な調査項目は、大きく分けると、(1)実施体制、(2)設備・機器類、(3)図書資料、(4)各種サービスである。ここでは、この調査データを用いる。

(1) 実施体制

まず、公立図書館における読書バリアフリーの取組み

の実施体制を見ていく。担当する職員がいない(0名)と回答した図書館が30・8%、読書バリアフリーに係る予算がない(0円)と回答した図書館は57・9%にのぼった。職員が読書バリアフリーに関する研修を受講した実績がないと回答した図書館は半数近い45・5%だった。これらの結果からは、実施するための職員の配置、職員の専門性、予算の確保に課題を抱えている現状がうかがえる。

(2) 設備・機器類

次に、読書バリアフリーに関わる設備と機器類の整備状況を見ていく。設備については、「バリアフリートイレ」の整備率が最も高く92・7%だった。このほか、「障害者用駐車場」と「利用者への貸出用車いす」も9割近い整備率だった。その一方で、図書館入口への「誘導チャイム」の整備は9・1%、補聴器ユーザー等のための「ヒアリンググループ」の整備は4・8%、「障害者用閲覧室」の整備は3・5%、図書館内の「音声案内」の整備は3・2%にとどまった。特に、視覚障害者等が図書館を利用する際に必要な情報を提示するための設備の整備が進んでいない現状にあるといえる。

読書や情報アクセスをサポートする機器類については、「拡大鏡」を整備する図書館が96・0%にのぼった。続いて整備率が高かったのは、図書のページを拡大して読める「拡大読書機」(図1)、文字でコミュニケーションするための「筆談ボード」、図書の特定の行に焦点を集中しやすくする「リーディングトラッカー」(図2)などだったが、いずれも4〜5割台の整備率だった。「立体コピー機」を整備する図書館は1・5%、図書のページめくりをアシストする「自動ページめくり機」は0・4%に過ぎなかった。

このように、設備・機器類の整備状況には、整備の進んでいるものとそうでないものとの差が大きい。この現状からいえる課題は明確であり、後者の整備促進である。

(3) 図書資料

続いて、図書館が所蔵する図書資料のうち、アクセスシブルな書籍等の所蔵状況を見ていく。図3から明らかのように、「大活字本」の所蔵率が92・1%と最も高かった。過去の同種の調査と比較して所蔵率の上昇が著しかったのは「LLブック」である。2010年時点



(画像：東京都府中市立図書館ウェブサイト)

図1 拡大読書機の例



図2 リーディングトラッカーの例

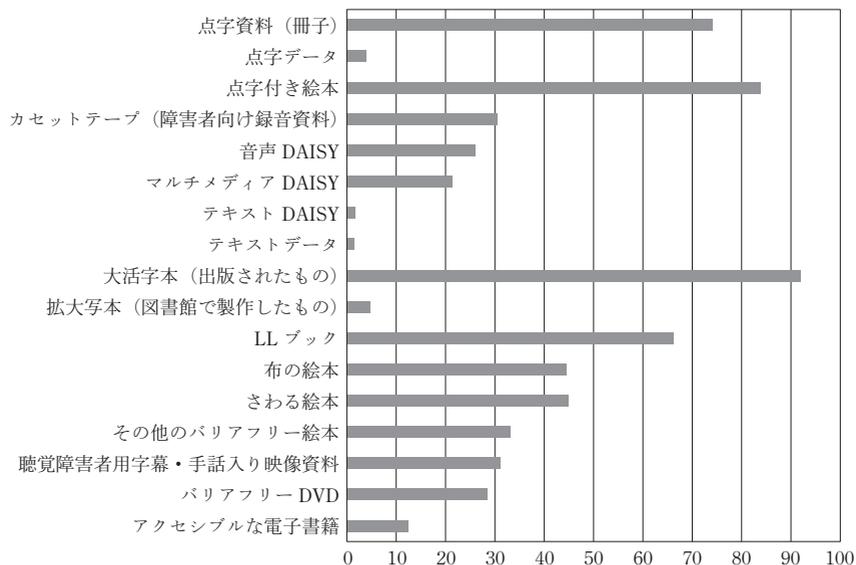


図3 アクセシブルな書籍等の所蔵状況

での所蔵率はわずか1・8%だったが、2017年には31・6%となり、今回の調査では66・3%となった。LLブックのLLは、スウェーデン語のLättläst(やさしい文章で書かれていて読みやすい)を縮めたものであり、サイズを表しているわけではない。やさしい日本語表現や文章の意味理解をアシストするピクトグラム(絵記号)を添えて作られる作品が多い(図4)。LLブックの主な読者としては、知的障害者や外国にルーツのある人などが想定されている。

アクセシブルな書籍等の現状について指摘できるのは、出版社によって出版され、購入可能な種類の図書資料ほど所蔵率が高く、また上昇傾向にあるということである。とはいえ、1館あたりの平均所蔵タイトル数で1000タイトルを超えるのは「大活字本」だけである。ほかのアクセシブルな書籍等の存在は、なかなか目立ちにくい。

そこで、さまざまな種類のアクセシブルな書籍等を多くの利用者に知ってもらい、手にとってもらいやすくする試み(棚づくり、コーナーづくり)が行われている。その代表例が「りんごの棚」づくりである(図5)。アップ



(出典：季刊『コトノネ』編集部 編集企画・文／大垣勲男・野口武悟 監修『魚屋の仕事——光司さんの1日(仕事に行ってください⑧)』社会福祉法人埼玉福祉会、2020年)

図4 LLブックの例

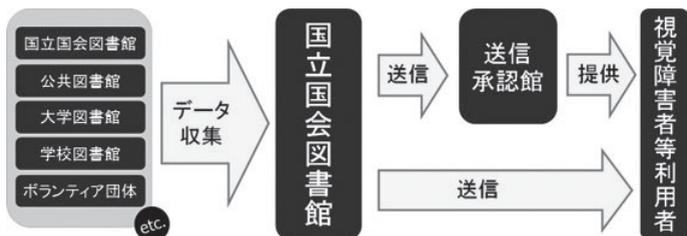


(画像：埼玉県立図書館ウェブサイト)

図5 「りんごの棚」の例

ル社からの寄付ということではなく、障害児支援のために作られたりんごのおもちゃを参考にしたことから「りんごの棚」と名づけられた。スウェーデン発祥の取組みで、現在は世界各国に広がりがつつある。今回の調査では「りんごの棚」を置く日本の公立図書館は7・3%だった。

所蔵率はそれほど高くないものの、視覚障害者等の音声による読書にとつてきわめて重要な資料に「DAISY(デイジー)図書」がある。DAISYは、



(出典：国立国会図書館ウェブサイト)

図6 「視覚障害者等用データ送信サービス」の仕組み

Digital Accessible Information Systemの略で、簡潔に言えば、国際標準規格のデジタル録音図書のことである。DAISY図書は、すでに述べた「著作権法」第37条第3項にもとづき、図書館において音訳者が製作複製している。しかし、全国の公立図書館におけるその製作率は13・6%にとどまる。音訳者の大半はボランティアであり、高齢化が進むなかで、世代交代、そして持続可能な製作体制の構築などが課題となっている。

「著作権法」第37条第3項で製作されたDAISY図書は、「サピエ図書館」(全国視覚障害者情報提供施設協会)、「視覚障害者等用データ送信サービス」(国立国会図書館)(図6)といったオンラインのシステムを介して、全国の図書館で利用できるようになってきている(ただし、利用対象者は視覚障害者等に限定)。つまり、これらのシステムを利用すれば、DAISY図書を製作していない、所蔵していない図書館でも、視覚障害者等の利用者に提供することが可能なのである。ところが、これらを利用していない図書館が80・4%にのぼる。せっかくのシステムがこれほど利用されていないのは実にもったいないことである。

(4)各種サービス

最後に、図書館における読書バリアフリーに係る主なサービスの実施状況を見ていく。「特別支援学校等へのサービス」の実施割合が最も高く43・5%だった。逆に最も低かったのは「刑事収容施設へのサービス」の2・4%だった。

注意したいのは、ここでいう実施割合が実際の利用実績を表しているわけではないということである。例えば、「対面朗読サービス」の実施割合は34・2%だが、そのうち実際に利用実績があったのは29・9%に過ぎなかった。他のサービスにおいても同様の傾向が見られた。

そもそも、図書館が読書バリアフリーに係るさまざまなサービスを提供していることを知らない人は多い。視覚障害者等でも同様である。知らなければ、利用にはつながらない。したがって、広報が肝要となるのだが、そこに課題がある。

現状の広報のメインは、ウェブサイトへの情報掲載や、チラシ・パンフレット・利用案内の作成・配布などであり、すでに図書館を意識している人にしか届かない手法ばかりである。もちろん、医療機関や福祉施設等と連

携して広報している図書館はあるものの、「眼科やロービジョンケアと連携してPRを行っている」はわずか0・5%に過ぎない。視覚障害者等のもとへ確実に届くアウトリーチ型の広報戦略が求められている。

以上、全国公共図書館協議会による2021年の調査データから公立図書館における読書バリアフリーの現状を見てきた。この調査では自由記述形式で「課題や問題点等」についてもたずねている。その記述内容を類型化すると、図7のように「予算」「職員の配置」「職員の専門性(そのための研修等を含む)」「ニーズ把握・周知・広報」の4項目が目立った。つまり、ここまで述べてきた現状と課題を多くの図書館自らがすでに実感しているということもできる。予算や職員の配置といった課題の解決は、図書館単独では難しい。やはり、図書館を設置する地方公共団体としての計画的な取組みが必要となる。地方公共団体による実効性ある「読書バリアフリー計画」策定が求められると先に述べた所以は、ここにある。

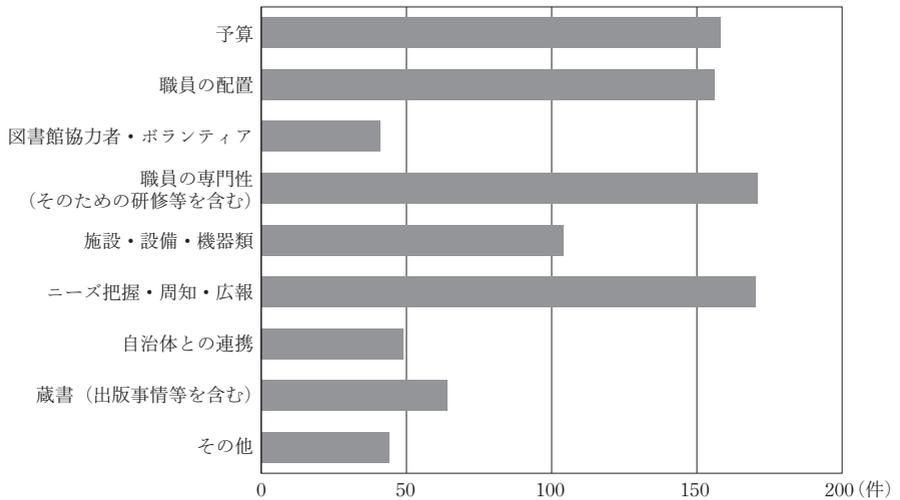


図7 図書館が捉える「課題や問題点等」

出版界における読書バリアフリーの取組み

ここまで公立図書館の現状と、そこから詳らかとなった課題を述べてきた。出版社により出版されている「換言すれば、整備しやすい」アクセシブルな書籍等の所蔵率が高いことから、出版界が読書バリアフリーに果たす役割は大きい。そこで、出版界の取組み状況についても簡潔に付言しておく。

「読書バリアフリー法」制定前からアクセシブルな書籍等を出版してきた出版社はあるし、同法制定後に社内「アクセシブル・ブックス事業室」を発足させた小学館のように社内体制を強化した出版社もある。しかし、出版界全体からすれば、読書バリアフリーの取組みに積極的な出版社はまだ少数派である。

こうした出版界の現状にあって、2023年4月には読書バリアフリーを進めるための組織が発足した。ABSC(アクセシブル・ブックス・サポートセンター)であり、JPO(日本出版インフラセンター)の中に設けられた。視覚障害者等の読書環境整備と出版社による読書バリア

フリーの取組み支援がABSCの主な目的である。まだ発足したばかりであり、現在の活動はウェブサイト (<https://abc.jp>) や雑誌『ABSCレポート』の発行による出版界等への情報発信が中心であるが、これからの活動の広がりを目指す。

また、出版界の取組みとして、もう1つ注目されるのは日本書籍出版協会が運営する出版書誌データベース [Books] (<https://www.books.or.jp/>) のアクセシビリティ向上の取組みである、2022年から、出版・流通している電子書籍がTTS(合成音声)による音声読み上げに対応しているかどうかを検索・表示できるようになった。

書店における読書バリアフリーの取組みも重要である。2020年度以降、出版界を交えた総務省の検討会では電子書店(ストア)のアクセシビリティが検討されてきた。その成果として、2022年度には『電子書籍販売サイト アクセシビリティ・ガイドブック』が作成、公表された。一方、実店舗の書店における読書バリアフリーの取組みについては、ほとんど議論されていない現状にある。実店舗の書店だからこそできることはたくさんある。例えば、公立図書館で取組まれている「り

んごの棚」に倣って、購入可能な大活字本やL1ブック等のアクセシブルな書籍等だけを集めた小さな棚やコーナーをレジ横などの目立つところに作る試みはいかがだろうか。

読書バリアフリーを自分事として

最近、各所からの読書バリアフリーに関する講演依頼が増えた。これも、筆者が読書バリアフリーへの関心の高まりを感じる理由かもしれない。講演後には「本の飢餓を早く解消してほしい」「視覚障害者等のみなさんが読書しやすい社会にしてほしい」などの感想をいただき、率直な感想でありがたいのだが、どことなく違和感もある。その違和感は、おそらく「〜してほしい」という他者任せ(他人事)な表現から生じているように思う。

もちろん、出版関係者や図書館関係者でない人にとって自分事になって読書バリアフリーを考えることは容易ではないかもしれない。それでも、高齢化率29・3%という世界一の超高齢社会を迎えた日本にあっては、加齢とともに目の見えにくさ(「読みづらさ」)は生涯のうち

誰しもが経験する可能性が高いし、現に読みづらくて困っている高齢者は多い。人生の途中で、病気やケガで視覚障害者等になる可能性だって誰しもが有している。もしそうになったら、読書をあきらめるのだろうか。多くは「私は読書をあきらめたくない!」と思うのではないだろうか。そうならば、ぜひ自分事として読書バリアフリーを考えてほしい。

そのうえで、自分事として読書バリアフリーに取組んでほしい。出版関係者や図書館関係者でない人でも取組めることに、周囲の人に読書バリアフリーの必要性や現状を伝えるということがある。ぜひ本稿を通して知ったことを周りの人に伝えていただきたい。それによって、読書バリアフリーへの理解の輪を少しずつでも広げることができると。多くの人々の理解の輪こそが、出版や図書館における読書バリアフリーの取組みの推進にとって何よりも力強い支えとなるからである。

【文献】

全国公共図書館協議会「2021年度(令和3年度)公立図書館における読書バリアフリーに関する実態調査報告書」2022年

野口武悟「読書バリアフリーの世界——大活字本と電子書籍の普及と活用」三和書籍、2023年

野口武悟「図書館における「障害者サービス」の現状と課題——公共図書館に焦点を当てて」『情報の科学と技術』74巻10号、2024年、4061412頁

フェミニズム的に、
史料や表象文化を読み解く!

ジャンス・ダルクの物語

象られた人生



キャスリン・ハリソン 北代美和子 訳

中世のミソジニー社会で戦った、男装の少女! ジャンス・ダルクはどのように象られてきたか。その変容の歴史を巧みに紡ぎあげる、博覧強記の物語。 ●4,950円

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 ●価格税込

スを店舗で展開したいとのことで、今後の展望について深く伺った。お店も一部を改装したとのことで、入り口はとても明るく入りやすい印象であった。また、SNSを通じた宣伝など、メトロ書店らしい集客にも力をいれていた。

3日目は路面電車に乗り、ゆめタウン内にある開店早々の紀伊國屋書店長崎店へ。店長の山田氏と人文書の担当の平崎氏にご挨拶する。こちらも佐賀店と同様に「今月のイチ推しフェア」を店舗入り口近くにて展開いただいております、お客様の反応が楽しみである。平崎氏が担当している人文書の棚についても、歴史の棚が減っているということであったが、開店からのジャンル分けで整理されていた。店舗として、教育書や学参書が充実していることもあり、心理など周辺分野の書籍の充実や、基本書の充実などを提案した。

訪問の最後は、長崎大学生協文教店へ、店長の松瀬氏と担当の永友氏からお話を伺う。キャンパスの学部構成により、人文書と理工書の専門書も含めた新刊をしっかりと置いていただいている。専門書の購入は大学教員がほとんどだが、コロナの影響で出張が少なく、その分の予算が書籍購入に回っていた結果、売り上げが増えていたのが、アフターコロナで出張が増えたことにより、コロナ前に戻ってしまったとのことであった。

3日間を通して、各店舗、人員が少なくなり、棚を細かく見ていくのが時間的に難しいなかで、担当の皆さんが人文書を大切に売っていきたいという意志を感じた。また「人文書販売の手引き」を参考にそれぞれ工夫をしながら棚づくりをされているのを、大いに感じることができた。

お忙しいなか、ご対応いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

提案した。昼食も天ヶ瀬氏に同席いただき、これまでの書店員としてのご担当歴などを伺いながら、お話をさせてもらった。

続いて、ジュンク堂書店福岡店へ。人流が天神から博多に流れているとのことであったが、店舗周辺は天神らしく人が多い。どうやら海外からの観光客も多いようであったが、人ごみをかきわけながら、店舗に到着。当日はお休みであった人文書担当の上杉氏がご対応にわざわざ来てくださった。人文書の棚は、昔からのジュンク堂書店を維持し、安心の品揃えの店舗であった。

ジュンク堂書店から地下鉄で博多駅に戻り、初日の最終訪問店である紀伊國屋書店福岡本店へ。店長の石堂氏は残念ながら出張でお会いできなかったが、店長代理の宗岡氏、久留米店店長代理の富田氏、また人文会とも長いお付き合いである田中氏に迎えていただいた。事務所でのご挨拶も早々に、棚担当の江上氏と緒方氏に実際の棚を見ながら、質問を受けて回答する。各分野の棚は整理されていて、江上氏と緒方氏が事前に質問を準備してくださっていて、細かいジャンル分けや、新刊の置き場所をどう判断していくのかといった点に一つ一つ回答していく。初日の夜は、田中氏と富田氏と懇親会を開催。昔話をお伺いし、これからの業界についてご教授いただきながら懇親を深めた。

2日目は開店から、丸善博多店に向う。副店長の前田氏と人文書担当の安高氏に、開店早々お忙しいところ、お話を伺う。一部、店舗改装を1年ほど前に行い、人文書の棚は以前より縮小されたとのことであるが、品揃えは豊富で、棚も整理されていた。ただ、フェアなどを行う平台がとれず、「四六判宣言」などは、通路に近い棚を使用しているとのことだった。

博多駅から電車で佐賀へと向かい、ゆめタウン内にある紀伊國屋書店佐賀店へ。店長の森田氏と人文書担当の比嘉氏に歓迎のパネルまで作っていただいて、盛大な歓迎を受ける。人文会との「今月のイチ押しフェア」は入り口近くが目立つ場所でご展開いただいております、お客様の通りも多い場所であった。また、元棚についても、それぞれのジャンルでどういった展開ができそうかの相談をした。昼食もお二方にご一緒いただき、交流を深めた。佐賀の滞りも足早に電車で次の目的地である長崎へ。

2日目の最後はメトロ書店長崎本店を訪問。副会長の川崎氏と専務の本田氏に歓待いただいた。外商部を店舗と同フロアの事務所スペースへ移転したとのことだが、これからは学校の司書の方にも来ていただけるようなスペー

義や趣旨を十分ご理解いただき、早くも「手応えを感じている」とのお話を大変嬉しく伺う。また、商品棚を前にしてご担当の小西智子さん、石動奈緒さんには先の研修会での補講や質疑応答など、実務に役立つリアルなやり取りを講師役の郡司さんをはじめ同行メンバーでさせていただき、有意義な訪店となった。

以上の通りの充実の3日間を過ごすことができたのも、忙しい日常業務の中で、丁寧に対応していただいたお店の皆さまのおかげです。お聞かせいただいた現状の課題や要望については真摯に受け止め、丁寧な対応に努めたいと思います。この場を借りて、皆さまには改めて心から御礼を申し上げます。

九州(福岡・佐賀・長崎)方面

報告 本橋弘行(ミネルヴァ書房)

- 期日：2024年6月5日(水)～6月7日(金)
- 参加メンバー：佐藤信治(大月書店)、東原亮佑(勁草書房)、栗生圭子(平凡社)、本橋弘行(ミネルヴァ書房)
- 訪問先(訪問順)
 - 【福岡】紀伊國屋書店ゆめタウン博多店、ジュンク堂書店福岡店、紀伊國屋書店福岡本店、丸善博多店
 - 【佐賀】紀伊國屋書店佐賀店
 - 【長崎】メトロ書店長崎本店、メトロ書店本店外商部、紀伊國屋書店長崎店、長崎大学生協文教店
- 感想

九州方面へは、一昨年に続いて人文会としては2年ぶりの訪問となった。初日は、羽田空港に集合し、空路で福岡へ。空港から博多駅へ地下鉄で移動し、バスで紀伊國屋書店ゆめタウン博多店へ向かう。人文書担当の天ヶ瀬氏にお話を聞くと、「人文書販売の手引き」にもとづいて、棚を整理中であるとのこと。手引きを参考にさせていただきながらということで、棚が整理されており、こちらからは、ジャンル分けが難しそうな書籍について置き場所を

2日目。

新倉敷へ移動し、喜久屋書店倉敷店へ。ご担当は三玉一子さん。人文書は長年ご担当されているが、いまだに尽きることの無い「売り方」への創意工夫の様子が、お話の端々から伝わってくる。版元や商品への探求も熱心で本当に頭が下がる。

続いて、岡山大学生協ブックストア。昼時の学内は学生の活気に満ちていたが、それにも増して歓待していただいたのはご担当の高橋芳夫さん。我々4社の書籍が目立つように棚から少し飛び出た状態で陳列してご準備いただいたお手間に感激した。また、新刊情報をデータに纏めて教員へ積極的に売り込むといった取り組みは、弊社内でも共有し協業できる施策として大事に持ち帰らせていただいた。職員の志水一平さんには、生協内の書籍業務実務者研修で発表された資料を頂戴した。全国生協内の書籍担当者間で、成功事例や施策が情報共有されている現状を改めて知ることができた。

そして、丸善岡山シンフォニービル店へ。小松原俊博副店長と人文書担当の小沢領さんにご対応いただく。コロナ禍以前にまだまだ戻ってはいない状況の中で、売れ筋商品の置き場変更や文具拡大など、店全体で対策されている様子を伺う。書籍では「他店で動きの良いフェミニズムや人類学関連などをもっと売り伸ばしていきたい」と仰っていた。

続いて、紀伊國屋書店丸亀店。ご対応いただいたのは、店長の寺島由佳さん、ご担当の米田香代さん。お二人ともお店の客層を十分把握されており、中でも毎月買う心理学専門書の顧客のために品揃えしているとの事例には、地方での書店の在りように触れた思いがした。弊社との施策は未実施店ではあるが、お二人であればぜひ取り組んでいただきたいと感じるお店だった。

3日目。

高松から紀伊國屋書店ゆめタウン徳島店へ。店長代理の川井菜愛さん、人文書担当の伊賀浩美さんにご対応いただく。まず「客数はコロナ禍以前に戻った」とのお話に心強い思い。人文書の中でも売れ筋の教育書に多くの棚を配しているが、弊社との研修を受けて「心理学など他のジャンルにも力を入れている」とのお話に研修を実施した意義を感じた。

そして、紀伊國屋書店徳島店を訪問。弊社との施策実施店舗でもあり、まずは四国地区店売部長でもある小澤康基店長にご対応いただく。今施策の意

また、日頃より会で取り組んでいる施策を、現場で確認することも大事な目的である。紀伊國屋書店と弊会で、人文書売り場のより一層の活性化を目指す新しい取り組みが立ち上がった。施策の成功には、お店の方々との意思疎通と現状の把握が欠かせない。よって今行程で訪問する10店舗中5店舗は紀伊國屋書店への訪問を計画した。

1日目。

ジュンク堂書店広島駅前店を訪問。人文書担当の濱本風美さんにお話を伺った。今春にリニューアルし、書籍はかなり減面になり、棚の再構築に苦勞されているとのことだが、コンパクトだが充実した品揃えのようにお見受けした。「減少したスペースの中で従来展開していたフェアをどう取り組んでいくかが課題」と仰っていた。

2店舗目は、丸善広島店。丸田香織さんにご対応いただいた。コロナ禍以前と比較すると「短時間で目的買いをする購買層の増加が顕著になり、店内を回遊し買い回りする客層の減少が気になる」とのこと。その中で、新刊発注や棚のメンテナンスへの時間をできる限り作るよう努められているとお話に対し「版元ができることは何か」強く課題意識を持った。

そして、紀伊國屋書店広島店、続いて紀伊國屋書店ゆめタウン広島店を訪問する。広島店は弊会との施策の実施店であり、時間もできる限り配分し、お店の方々とより多くやり取りすることを心掛けた。中国地区店売部長であり西日本エリア担当の小島珠美役員に、まずは昨今の市況を伺う。「この度の施策を通じて人文書全体の底上げを図りたい」とのご意見をありがたくも身の引き締まる思いで伺う。その後、山本紗綾店長からは施策への具体的なご指摘をいただき大変参考になった。お店の方のリアルな声は常に胸に刺さるものだ。人文書担当の岡利昌さんには、誠信書房・郡司さんによる心理学書の棚を使った研修会を体験していただいた。限られた時間だったが、双方の熱心なやり取りに、訪問の成果と施策への大きな期待を抱きながらお店を後にする。

ゆめタウン広島店では、ご担当の松本英里子さんにじっくりお話を伺うことができた。ショッピングモール内のお店としての幅広い客層を的確に捉え、棚の整理から新刊まで目配りしているとお話を伺いとても頼もしく感じた。

氏・岩崎氏によると文芸・文庫・実用書棚減だが売上は悪くない。近隣書店閉店の影響か文芸、コミックはやや伸長。店全体も人文の前年並みで推移とのこと。しかし教育書はデジタル教材の影響か良くなく先生1人あたりの購入冊数減、単価低下を実感している。宗教書も手堅い分野だったが新刊が伸びず苦戦中とのこと。

以上で今回の行程を無事に終え解散式を行った。駆け足での訪問だったが、素晴らしい出会いと気づきに恵まれた3日間だった。小会の訪問を温かくお迎え下さり、本当にありがとうございました。書店・大学生協のみなさまに心より御礼申し上げます。

中国・四国方面

報告 森 卓巳(青土社)

- 期日：2024年6月26日(水)～6月28日(金)
- 参加メンバー：郡司恵太(誠信書房)、河内秀憲(筑摩書房)、岩野忠昭(白水社)、森卓巳(青土社)
- 訪問先(訪問順)
 - 【広島】 ジュンク堂書店広島駅前店、丸善広島店、紀伊國屋書店広島店、紀伊國屋書店ゆめタウン広島店
 - 【岡山】 喜久屋書店倉敷店、岡山大学生協ブックストア、丸善岡山シンフォニービル店
 - 【香川】 紀伊國屋書店丸亀店
 - 【徳島】 紀伊國屋書店ゆめタウン徳島店、紀伊國屋書店徳島店
- 感想

コロナ禍で中止していたグループ訪問を再開したのが昨年秋。日常の賑やかさや顧客がいまだ戻らないという声が多く聞かれた半年前から、街や店舗はどの程度回復しているのか？ お店で働く方々の行動変容は？ 弊会が日頃よりお世話になっている書店や大学生協のリアルな実態を肌で感じ、課題を持ち帰り、それを会員社で共有し、今後に繋げること。これがグループ訪問の第一目的である。

族等の利用者増が予想され同店の集客アップが期待される。

再び大阪の中心地へ戻り、近鉄百貨店内に位置するジュンク堂書店上本町店へ15時過ぎの訪問。いかにも百貨店のお客様と思しき中高年の方々がレジに長い行列を作る。井上店長によると人文書のシェアは低いそうだが、各ジャンルとも基本書はカバーされている印象。近隣に有力進学校や予備校があり学参や児童書の売上は同法人上位だそう。レジ周辺のフェアコーナーは独自企画含め活気がある。「高校生のためのブックガイド」は客層に合っていると好感触。手持ち10部をお渡した。慌ただしく移動し、閉店時間間際の関西大学生協書籍店へ急ぐ。エンド台では山本氏企画の「小さな出版社のイチ推し本」フェアが展開中。春学期の採用品販売結果や1F食堂から2Fへ来店してもらった難しさ等を伺う。その後、梅田周辺で丸善ジュンク堂書店のみなさまと懇親会を行う。

最終日。中津駅から旭屋書店外商部へ向かい山村氏と西村氏にご対応いただく。こちらも春学期の採用品が厳しかったとのこと。直接訪問・対面営業に戻っている中で、今まで活用していた日本書籍出版協会の近刊情報誌「これから出る本」が昨年末で休刊となり不便に感じているそう。林部長をはじめとする外商部のみなさまにもご挨拶させていただく。次に大学生協関西西北陸書籍事業部へ。北田氏によると今春の採用品はどの店舗も苦戦。購入率だけでなく学生数の減少が大きい。コロナ以降、学生も先生もキャンパス滞在時間が短くなり店舗を訪れる時間自体減ったとのこと。その後ジュンク堂書店近鉄あべのハルカス店へ移動。限られたスペースだがしっかりと売れ線を展開してくださっており頭が下がる思い。同店のあるフロアが改装中ながら売上は落ちていない。ただ人文ジャンルの集客は蔵書量のこともあり梅田や難波の系列大型店へ流れてしまうとは増田氏の弁。

昼食を挟み僅かな移動を経て紀伊國屋書店天王寺ミオ店へ。女性客中心の客層と思いきや世代問わず地元住民に活用されている印象。人文書は新刊含め揃っている。森永店長からは人文棚の流れのすぐ近くに岩波文庫を配置してあることが強みと伺う。ただ専門書を探すお客様はジュンク堂書店へ流れてしまうそう。そして最後の訪問先となるジュンク堂書店難波店へ足を運ぶ。新刊・話題書コーナーがレジ前から奥へ移動、レジ前に万博オフィシャルストアの準備と文具コーナーを改装中。大阪・関西万博公式キャラクター「ミャクミャク」の巨大パネルの隣に同店「開店15周年のごあいさつ」あり。日野



紀伊國屋書店泉北店の心理棚前で棚作りについて意見交換

に感じた。その後、紀伊國屋書店のみなさまと懇親会を行った。

2日目は雨のなか紀伊國屋書店本町店へ足を伸ばす。同店は450坪、ビジネス書やWeb系資格書充実の品揃え。学参は高校生向けまでを展開している。人文書は新書の並びだが、心理のみレジ寄り自己啓発書の配置となっていた。宇野氏は人文書だけでなく社会・理工・自然科学等店内奥側エリアのジャンル担当を兼任。元々ビジネス街であるが、リーマンショックで地価下落し、企業の支店が撤退、コロナ前から何棟かのタワーマンションが建設されファミリー層が増加、シェアオフィスやデザイン事務所が移ってきており、多様なお客様が来店するようになったそうである。

やや長い移動と昼食を経て、紀伊國屋書店泉北店へ。車窓の移り変わりを感じていたが、泉ヶ丘駅周辺は我々が知る大阪とは違う雰囲気。高島屋と併設のショッピングモール「パンジョ」は今年で50周年。4Fに位置する同店は開店から27年と地域に根ざしている。280坪の店内は、壁棚以外は低く平積みを多数展開可能な什器。心理棚の後方で前述の「人文書 今月のイチ押し」フェアが開催中。西尾店長に丁寧にご対応いただく。かつて泉北ニュータウンへ入居したニューファミリーがそのまま常連客となった一方で新たなファミリー層も増加中。本町店とはまた異なった来店客層の様様。2025年11月に近畿大学医学部・病院が移転予定で、学生はもちろん患者さんとその家

訪問店へは可能な限り「人文書販売の手引き [第3版]」を丁寧に案内することを心がけた。

初日、まずは紀伊國屋書店グランフロント大阪店開店前の行列に加わる。今月より同法人と小会の共同施策として開始した「人文書 今月のイチ推し」フェアを店内入口から少し入った歴史・宗教棚の一角で展開しているのが目に入る。棚一本のなかで工夫して陳列・販売されており、担当の菅崎氏曰くそろそろ棚差しと面陳の入替時期だそう。仕入武内氏によると同店は新聞書評の反響が根強く、書評掲載商品の展開技術等、貴重なお話を伺えた。続いてMARUZEN&ジュンク堂書店梅田店へ。前回訪問時と異なる点は、店内改装と売場再編を経て7Fに駿河屋梅田茶屋町店が開店したことが挙げられる。高山副店長によると今年3月の開店以来、専門書に関してはさほどシャワー効果の恩恵は実感できていないようす。5F人文書は社会と統合、レジ横の棚は解体されビジネス書の平台に模様替え。壁面フェア棚も社会ジャンルの商品が多数展開中だった。担当の岡氏は2月に1F新刊・話題書棚スペースにできた「2025 大阪・関西万博オフィシャルストア」のレジ当番から駆けつけていただき市況等のお話を伺うことができた。2Fの麻雀プロリーグ戦「Mリーグ」オフィシャルショップ、3F「EHONS」は以前と変わらずに展開。

昼食を挟んで紀伊國屋書店梅田本店へ。午後一というのもあり店内どこの棚もお客様で一杯。西前役員、長谷川店長、中本氏、角矢氏にそれぞれご挨拶をさせていただく。人文担当の小野氏、久保氏、小湊氏とバックヤードから棚前へ場所を移しながら各ジャンルについてお話しできる時間を取ってくださった。心理担当久保氏の、他店情報やSNSは参考にせず直接来店するお客様に対してどう陳列するのが最善かを意識して棚を作っているとの発言が特に心に残った。西前役員からは、口伝の世界である人文担当の独自色と、同法人新宿本店3Fアカデミック・ラウンジの役割についてお話を伺う。その後、ジュンク堂書店大阪本店へ移動。店頭で今年3月に開店25周年を迎えたとのこと挨拶が掲示中。星野副店長、担当の櫻井氏・日影氏、加えて社会科学担当の藤村氏にもご挨拶ができお話を伺えた。堂島アバンザ内や周辺企業のお客様の来店～購入がコロナ前まで戻らず、客層に変化はないが客数減との現状。会社によってははうめきた地区へ移っていくところがあるそう。半年前の訪問時と比べて専門書エリアの品揃えや混み方に大きな変化はないよう

コーナーがはじまる。

最後は高崎市へもどり、くまざわ書店高崎店へ。店長齋藤いづみ氏にご対応いただく。人文書棚は、面での陳列を減らして、プレートを増やし、わかりやすさをもとめ模索中。そこから売上がよいジャンルに徐々に特化していきたいそう。店の規模的には、現在の棚本数がベストのように思われるとのこと。郷土本コーナーにて高額書籍『近世山村地域史の展開』（吉川弘文館）が売れたそう。

わたし個人としては久しぶりの北陸、群馬への訪問であった。前回の訪問時、富山駅はリニューアル前であったし、金沢には太洋社の支店がまだあった。あれから随分時間がたち、出版業界を取り巻く状況は激変した。しかし、そんななかでもあの店舗ではあの人がまだ以前と同じように頑張っていたという変わらなさにこころ励まされ、本をハブに進化しようとしている書店の活動にこころときめく気持ちになった。とても勉強になった3日間であった。

お忙しいなか丁寧にご対応いただいたみなさまにこころより感謝申し上げます。

大阪方面

報告 吉岡 聡(春秋社)

- 期日：2024年6月17日(月)～6月19日(水)
- 参加メンバー：段塚省吾(紀伊國屋書店)、福土篤太郎(晶文社)、澤畑壘(東京大学出版会)、水口大介(創元社)※一部のみ参加、吉岡聡(春秋社)
- 訪問先(訪問順)
【大阪】紀伊國屋書店グランフロント大阪店、MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店、紀伊國屋書店梅田本店、ジュンク堂書店大阪本店、紀伊國屋書店本町店、紀伊國屋書店泉北店、ジュンク堂書店上本町店、関西大学生協書籍店、旭屋書店外商部、大学生協関西西北陸書籍事業部、ジュンク堂書店近鉄あべのハルカス店、紀伊國屋書店天王寺ミオ店、ジュンク堂書店難波店
- 感想
大阪周辺は3年連続、半年振りの特約店グループ訪問実施となる。前回未

最後に、うつのみや金沢香林坊店へ。店長大井秀久氏、人文担当の大田伸一氏にご対応いただく。大田氏による人文書の品揃えは、香林坊店へ行けば必ず欲しい本に出会えると言われる所以であろう。店舗の売上は相対的に伸びているという。店内にある、金澤文豪カフェあんずにて冷たいコーヒーをいただく。

2日目の午後は、北陸トーハン会の研修会に参加する。「人文書販売の手引(第3版)」をベースに、人文書の基礎知識、哲学・思想、心理、宗教、歴史、社会を、人文会の各ジャンル担当が解説する講義形式で行なった。北陸トーハン会所属書店から30名ほどお集まりいただいた。ご自身の業務を途中抜けしお越しいただいたかたが多かったようだ。研修後のアンケートでもしっかりご意見をいただくことができ、実りある研修会となった。

5月31日(金)、最終日1店舗目は、金沢市から高崎市へ入り、未来屋書店高崎店へ。店長小林さや香氏、人文担当の狩野あゆみ氏にご対応いただく。イオンモール高崎内のテナントなのだが、併設された「無印良品」とのコラボ店舗という珍しい形態であった。レジが共用で、売り場では、テーマに合わせて「未来屋書店」「無印良品」双方の商品がいっしょに陳列されている。ジャンル横断型の「ノンフィクション・エッセイ棚」など未来屋書店本部と現場の連携が随所に見られる。群馬県の美術館、独立系書店マップなどフライヤー類を集めたコーナーも楽しい。

続いて、高崎市から前橋市へ移動し、ブックマンズアカデミー前橋店へ。店長の大竹宏氏、商品部部長植野豊氏、商品部書籍担当係長齊藤哲也氏にご対応いただく。階段を上って正面に地域の住民から寄贈されたという甲冑が展示され、その奥には、コワーキングスペースとしても利用できる、アクセア前橋店が入っていた。さらに、商品部の植野氏と齊藤氏からは、文真堂書店での、地域の農家の野菜や加工品の販売、マスコットキャラクター「ベラちゃん」のプロデュース、キッチンカーを集めてのイベントなど、新しい書店の「かたち」を次々とご紹介いただいた。

次に、紀伊國屋書店前橋店へ。店長廣瀬哲太氏、人文担当岩田紗菜氏にご対応いただく。店舗入ってすぐに、新刊台、各フェア棚、通路にもミニフェアがあるなど、動線を意識した陳列が印象的であった。人文エリアでは、岩田氏と各ジャンル担当が棚の前に、アイデアを出し合った。富山店同様、この6月からは、紀伊國屋書店×人文会コラボ棚「人文会 今月のイチ押し」

でたアイデアで、人文書コーナーへの導入に、既存のフェアコーナーとして使っている什器の一部を人文書の新刊台にする案がでた。これは画期的なものではと思う。この6月からは、紀伊國屋書店×人文会コラボ棚「人文会 今月のイチ推し」コーナーがはじまる。

富山市のトリは、BOOKSなかだ掛尾本店本館。主任店長澤田健太郎氏と、同じく主任店長の坂東美幸氏、本部の牧野有希子氏にご対応いただく。澤田氏渾身の最新刊台は、ジャンルの垣根を超えた多種多様な新刊が陳列されており、思わず手がのびる。昨年同様、「歓迎人文会御一行様」の看板を店舗前に設置いただく。

北陸道経由で金沢市、金沢ビーンズ明文堂書店へ。翌日は棚卸というご多忙時に邪魔し、人文担当の藤さやか氏にご対応いただく。梯子を使わないと手の届かない背の高い棚に圧倒される。藤氏自ら発注をされているとのことで新刊はしっかり入っていた。棚の構成について、人文会ジャンル担当と話し込む姿に熱意を感じる。

初日最後は、TSUTAYA金沢野々市店へ。人文担当の瀬戸亮太氏にご対応いただく。同じ明文堂でもビーンズの白を基調とした店舗とは違い、黒のスタイリッシュな背の高い棚が続く。棚卸前とのことでそれらの棚にはたくさんのメモが貼られていた。瀬戸氏から、ビーンズに送られたFAXを別店舗でも閲覧できる明文堂の仕組みを教えていただく。

5月30日(木)、2日目はうつのみやセールスセンターからスタート。早朝にもかかわらず、社長宇都宮元樹氏、取締役鏑泰氏、取締役興村正樹氏にご対応いただく。社長室の壁に貼ってある石川県地図には「能登半島地震」で被害を受けた店舗や取引先が赤や白のピンでマークされていた。国道249号線などの主要幹線道路が寸断された影響で、能登方面へ行くのが一日仕事になったという。震災後の自粛ムードは、3月頃から緩和され、被災されたかたに配慮しながら、自分たちで経済をまわしていこうという雰囲気変わったそうだ。セールスセンターの入口では、「能登半島地震被災地域の子どもたちに文房具を贈ろうキャンペーン」が行なわれていた。

続いて、紀伊國屋書店金沢大和店へ、人文担当の川向貴志氏にご対応いただく。大和百貨店香林坊店の7階という立地から、お客の9割が中高年の女性とのこと。人文書の棚には、鈴木大拙、西田幾多郎など金沢ゆかりの人物の書籍が並ぶ。

2024年グループ訪問報告

北陸・群馬方面

報告 三木 拓(法政大学出版局)

- 期日：2024年5月29日(水)～5月31日(金)
- 参加メンバー：乙子智(慶應義塾大学出版会)、水口大介(創元社)、片桐幹夫(みずず書房)、片山伸治(吉川弘文館)、三木拓(法政大学出版局)
- 訪問先(訪問順)

【北陸】文苑堂書店富山豊田店、紀伊國屋書店富山店、BOOKSなかだ掛尾本店本館、金沢ビーンズ明文堂書店、TSUTAYA金沢野々市店、うつのみやセールスセンター、紀伊國屋書店金沢大和店、うつのみや金沢香林坊店

【群馬】未来屋書店高崎店、ブックマンズアカデミー前橋店、紀伊國屋書店前橋店、くまざわ書店高崎店

●感想

北陸・群馬方面へは、昨年に続いて人文会としては2年連続での訪問となった。初日東京から新幹線で富山市へ入り、同日そこから北陸道で金沢市へ、そして最終日に金沢市から新幹線で高崎市へと移動した。能登半島地震の復興支援のため北陸のタクシーは能登へ出払っており簡単に予約ができない状態であったため、北陸での移動はレンタカーをメインにした。最終日の群馬も、同じく小回りの効くレンタカーをメインに利用した。

5月29日(水)、まずは、文苑堂書店富山豊田店。副店長奥井将氏と人文書担当の岡本緑氏、斎藤あゆみ氏にご対応いただく。午前9時から営業していることもあり、訪問した午前10時にはすでにお客さんのものであろう自動車が駐車場に多く停まっており驚く。人文書棚の構成はバランスがとれており基本図書もしっかり入っていた。奥井氏から「これだけははずせない基本図書リスト」のようなものがあれば、それをもとに棚管理、専門書担当者の育成ができるのではないかとご提言をいただく。

続いて、紀伊國屋書店富山店へ。店長白山善史氏、人文担当の渡邊このみ氏にご対応いただく。事前に渡邊氏から人文書棚に関する質問を預かっていたため、各ジャンルの棚を前に実りある対話が可能となった。そのなかから

のバイタリティは噂通り(?)だった。

14時すぎに今回の研修の最終地・宮崎に到着。そういえばもう10月も半ばすぎだというのに、この3日間は真夏のような暑さ。宮崎駅前にそびえたつヤシの木が揺らめく駅の反対側には、これから訪問する「アミュプラザみやぎき」がある。まだ開店して4年目の紀伊國屋書店アミュプラザみやぎき店は、紀伊國屋書店の中でも新しい店舗だが、駅前の立地とあって、地元の認知もどんどん増しているようだ。長友裕幸店長によると、平日よりも土日型の店舗とのことで、地元の近隣の書店が8月に閉店したため、9月の昨対はよかったとのこと。客層のメインは女性で、とくにここ最近では若い方の集客が増えてきており、2年前くらいからK-POPの輸入CDとDVDをはじめたことで、高校生や大学生からの問い合わせも増えているとのことだった。人文書については、福岡県の久留米店店長でもある、九州地区店売第二部長の花田吉隆様に宮崎までお越しいただき、各社それぞれご案内をさせていただいた。後日、九州地区の店長会の場で今回の提案内容を共有いただけたとのこと。お時間をつくっていただけたことに一同感謝。

最後の訪問は、蔦屋書店宮崎高千穂通り。駅前からまっすぐに伸びる通りを歩くこと10分ほどでお店に到着。中心地にあり、1Fは雑誌、新刊、生活雑貨。2Fには書籍とコミックがあり、郷土本のコーナーなどもしっかり設けられていた。あいにく青木店長は不在だったため、都留様にご対応いただいた。県庁が近くにあり平日はビジネスマンが多いとのこと。ジャンルごとの棚と平台では話題書が展開されており、地元の絵本作家さんとのイベントなども開催されているようだった。

これにて5年ぶりに開催された3日間の南九州の全体研修は無事に終わることができました。今回19名という大所帯にもかかわらず、ご多用の中、快くお迎えいただきお世話になったすべての書店のみなさまに、心より感謝申し上げます。また、今回同行していただいた、住田直也様(トーハン)、山下竜馬様(日販)にも、改めまして心から感謝申し上げます。お店全体を見てご指摘いただいた点など、我々も大変参考になりました。みなそれぞれ会社は違えど、人文書売り伸ばしていくという一つの目標に向かって、今後につながる有意義で貴重な研修となりました。ありがとうございました。

小城天平様にご対応いただき、最後は上蘭このみ店長にもご挨拶させていただいた。

続けて、鹿児島中央駅ビル内にある紀伊國屋書店鹿児島店を訪問。小森圭吾店長によると、2004年に開店した「アミュプラザ鹿児島」は、今年の9月でちょうど20周年。近隣の商業施設の閉店などもあり、集客が増えているとのこと。他店ではビジネス書が苦戦しているという声も多い中、駅という立地からビジネスマンが少しずつ戻ってきているとのことで、同店ではビジネス書の売上があがり、それにともなって人文書の動きもあがっているようだ。人文ご担当の濱洲美妃様にもご挨拶させていただいた。

これにて2日目の訪問が終了し、昨日同様、訪問させていただいた書店さまを囲みながら、有意義な交流の場となった。

10月18日(金)

最終日のスタートは、鹿児島市の繁華街、天文館エリアのジュンク堂書店鹿児島店から。もともとこのエリアは系列の丸善天文館店とジュンク堂書店の2店舗があり、文芸・コミックなどは丸善、専門書類はジュンク堂で販売するという差別化を図っていたが、今年の3月に丸善が閉店し、すべてのジャンルをジュンク堂書店で販売することに。10月1日には、文房具専門の丸善鹿児島山形屋店が45坪でオープンしたばかりとあって、お忙しい中での訪問となってしまった。副店長の土師千幸様にご挨拶した後、人文ご担当の臼井洋明様にご対応いただいた。お店の状況としては、以前の丸善天文館店にあったジャンル(文庫、文芸など)は伸びているものの、もともとジュンク堂書店がメインで扱っていたジャンルの売上(人文含む)は横這い。お客様自体は増えているので、本のよさをもっとPRできれば、売上を伸ばせる余地がまだまだあるとのこと。各版元がおすすめをご案内させていただいた際には、1点1点売り方のアドバイスもいただくなど、出版社は本を搬入したらあとは書店さんまかせではなく、人文書の魅力を店頭でどう伝えることができるのかを、考えていききっかけをいただいた。

これにて鹿児島の訪問が終わり、特急で2時間かけて宮崎へ。右手に桜島を見ながら車内でお昼となったのだが、お弁当の箸がないというハプニング。しかし我々は人文会。自分の名刺をスプーンがわりにする人、お弁当の蓋を割って箸を作る人、極めつけは海鮮丼をおにぎりにしてしまう人……人文会



熊本城にて

会として訪問いただけることがありがたいというお言葉をいただいた。我々としても、貴重な時間を割いて迎えていただき、人文書の売り伸ばしを一緒に取り組んでくださる書店のみなさまに、心から感謝する会となった。

10月17日(木)

2日目の始まりは、日本三名城の一つとしても名高い熊本城を見学。熊本地震の復旧作業が続く中、インバウンドをねらった演出など見どころ満載。一気に天守閣まで上がり、その足で蔦屋書店熊本三年坂を訪問。熊本市の中心街にあり、2004年の開店から20年。雑誌、雑貨などは1階で、専門書は地下1階に在庫をかなりそろえられていた。古味信夫店長と文芸ご担当の迫彩子様にご対応をいただいたものの、開店直後のあわただしい時間での訪問となってしまった。熊本の訪問はこれにて終了となり、次なる目的地の鹿児島へ新幹線へ向かう。

鹿児島での1軒目は、鹿児島中央駅からバスで20分ほどかけてブックスマスミ オプシアへと向かう。県内最大規模の敷地を誇る、地元企業による老舗。シックで落ち着いた専門書フロアには、人文書、医学書、理工書など幅広い品ぞろえ。岡元謙弥マネージャーによると、今年の4月から新商材であるホビー(プラモデルやおもちゃなど)をいれたことで書籍売場が20~30坪減ったものの、ファミリー層が増えたとのこと。書籍ではビジネス書が厳しい一方で、一部在庫を調整した人文書は130%の伸びが見られるそうだ。人文ご担当の

野に精通している版元がそれぞれ実際に棚を拝見し提案させていただいた。テーマごとにプレートが挟まれており、お客様にとって見やすく探しやすい棚づくりを日々実践されていることが一目でわかり、版元からも賞賛の声があがっていた。

次に伺ったのは熊本市郊外の「ゆめタウンはません」内にある紀伊國屋書店熊本はません店。2009年の開店から今年で15年。西川和磨店長によると、2016年に発生した熊本地震の際は棚が破損するなど被害も大きかったとのこと。人文書の客層は年齢層が高めとのことだが、特に精神世界の動きがよく、固定のお客様がついていらっしゃる模様。またレジ前では半導体のコーナーもしっかり作られていた。

ここからは熊本駅を目指し、バスで30分ほど移動。2021年4月に開業した駅隣接の大型商業施設「アミュプラザくまもと」内のメトロ書店熊本本店に向かう。川崎孝会長、海老澤敬一副社長、本多紀子専務が長崎の本社からお越しくださり快く迎えていただいた。木村郁子店長によると、学生などの若い客層が中心で、昨年売場をリニューアルし、もともと店舗の奥にあったコミックを前面に。人文書は店舗奥側にまとめられているものの、必要十分な在庫を維持している。オープンからまだ3年ほどと、試行錯誤を重ねながらも地域のお客様に利用しやすい店舗にしていこうという意気込みがうかがえる。本多専務からは、今後は長崎に続いて熊本でも地元書店とも協力しながら外商にも力をいれていく準備をしていきたいとお話を伺った。

初日の最後は長崎書店を訪問。市内の中心街で1889(明治22)年の開業以来、長く地元住民に愛されている老舗書店。それほど広くはない店舗ながらも、専門書から児童書まで幅広い品ぞろえ。児玉真也様にご対応いただきながら、短い時間を惜しみつつ店内を見学。6月30日には長崎次郎書店が閉店となったものの、地元のお客様だけでなく、たまたま休日をつかって関西から来られていた書店員さんにも遭遇した。

初日の締めくくりは、本日伺った書店のみなさまをお招きして懇親会を開催。会の中では長崎書店の長崎健一社長から、「いまはまだ言えないが大きなプロジェクトがもうすぐ始まる」とのことみな興味津々。後日、熊本県で発行された「プレミアム付き図書券」のことだったと、東京に帰ったあと報道で知ることとなった。また、紀伊國屋書店熊本光の森店の西村店長からは、コロナ禍以降、出張の機会が以前より減る版元も多い中、こうして人文

2024年秋季研修旅行報告

熊本・鹿児島・宮崎

栗生圭子(平凡社)

●期日 2024年10月16日(水)～10月18日(金)

●訪問先

【熊本】紀伊國屋書店熊本光の森店、紀伊國屋書店熊本はません店、メトロ書店熊本本店、長崎書店、蔦屋書店熊本三年坂

【鹿児島】ブックスマスミ オプシア、紀伊國屋書店鹿児島店、ジュンク堂書店鹿児島店

【宮崎】紀伊國屋書店アミュプラザみやざき店、蔦屋書店宮崎高千穂通り

今回で53回目となった人文会の全体研修は、新型コロナウイルス感染症の影響による情勢を考慮し2019年を最後に休止、今回が5年ぶりの開催となった。全体での九州エリアへの訪問は2011年(福岡・熊本)以来。宮崎県への訪問は実に1978年以來となる。参加者は会員社17名に加えて、トーハン、日販より各1名ご同行いただき、総勢19名での行程となった。

10月16日(水)

初日は熊本を訪問。空港からバスで市街地に向かう道すがら、半導体業界で最も注目されている企業の一つ、台湾のTSMCの熊本工場を通りかかった。バスの運転手さんによると、工場ができたことで人口が増え、住宅が次々できてきているとのこと。

今回最初に訪問させていただいた紀伊國屋書店熊本光の森店は、上記の工場と同じ菊陽町の大型ショッピングセンターである「ゆめタウン光の森」内にあり、週末は家族連れでにぎわう店舗。西村健一店長曰く、ビジネス書や理工書が伸びており、雑誌やコミックを求めるお客様も増えているとのこと。店舗としても売上が伸びているのは、TSMCの効果にもよるようだ。

人文ご担当の山村里香様には、事前にアンケートをいただき、主に精神世界とスピリチュアルの並べ方や、哲学・思想・心理学の分け方など、各分

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2024年12月現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	佐藤 信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
紀伊國屋書店	段塚 省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3124
勁草書房	束原 亮佑	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	福土篤太郎	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房	郡司 恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青土社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創元社	水口 大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑摩書房	河内 秀憲	111-8755	台東区藏前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	足立 佑	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日本評論社(休会中)		170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	栗生 圭子	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	三木 拓	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
みすず書房	片桐 幹夫	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋 弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
吉川弘文館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事

片桐幹夫

会計幹事

片山伸治

書記幹事

水口大介

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会

◎吉岡 聡 ○段塚省吾 佐藤信治・福土篤太郎・郡司恵太・栗生圭子

調査・研修委員会

◎森 卓巳 ○束原亮佑 足立 佑・河内秀憲

広報委員会

◎岩野忠昭 ○乙子 智 三木 拓・本橋弘行

人文会ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>

(各種情報/各社へのリンクはこちらからどうぞ)

慶應義塾大学出版会

<https://www.keio-up.co.jp/>

混迷のアメリカを 読みとく10の論点

西山隆行・前嶋和弘・渡辺将人著 トランプが勝利をおさめ、経済的にも政治的にもますます分断が進む、超大国アメリカ。中間層の喪失と経済、政治不信、文化戦争、対外関係など、世界が目にするアメリカの課題を、10の論点からあぶりだす。◎2,200円

マイナーな感情

アジア系アメリカ人のアイデンティティ
キャシー・パーク・ホン著／池田年穂訳
「模範的なマイノリティ」と言われながらマイノリティとしての存在感すらないアジア系アメリカ人の複雑な感情を克明に描く珠玉のノンフィクション。◎2,750円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

クラクフ・ゲットーの 薬局

第二次大戦下のポーランド、クラクフのユダヤ人居住区にて、ドイツ当局の退去命令に従わずナチの暴虐の記録者として過ごした薬剤師による回想録

山田洋次が見てきた日本

フランスで山田洋次作品を普及するジャーナリストが監督の懐深くに飛び込み、大胆かつ細やかに著した評伝の決定版。

【著】クロード・ルブラン
【訳】大野博人、大野朗子
【定価】9900円(税込)

【著】タデウシュ・バンキェヴィチ
【訳】田村和子
【定価】2620円(税込)

大月書店

〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-16

TEL 03-3813-4651 HP otsumishoten.co.jp

文化はいかに

情動をつくるのか 人と人のあいだの心理学

バチャ・メスキータ

高橋洋訳

唐澤真弓解説

〈喜び〉〈怒り〉〈悲しみ〉などは世界共通ではない。情動が、文化や言語、民族、人種、ジェンダー、社会・経済的階層ごとに異なることを正しく理解すれば、異文化間の衝突回避に役立つと提言する、文化心理学の先駆者による集大成。

▼定価3300円10%税込

グローバル化時代に
備えておきたい
〈情動リテラシー〉

紀伊國屋書店 出版部:東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL03(6910)0519

認知的不正義ハンドブック

税込3300円

理論から実践まで

佐藤那政・神島裕子・榎原英輔・三木那由他 編著
認識的不正義をめぐる研究動向を知り、日本で生じている実践的問題について考えるために。

専門図書館におけるキャリア 形成と人材育成

税込5280円

青柳英治 著

キャリア形成と人材育成のあり方を把握し、知識・技術の認定を可能とする制度を提示する。

新装版 アブダクション

税込3080円

仮説と発見の論理

米盛裕二 著
科学的発見や創造的思考を生み出す推論「アブダクション」を理解するための最良の書。

勉草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<https://www.keisoshibo.co.jp>

文化心理学への招待

記号論的アプローチ

ヤーン・ヴァルシナー 著 サトウ タツヤ 監訳
「記号」を媒介とした、人間の未来志向的かつ
動態的な発達を描くことを目指す「記号論的動
態性の文化心理学」について解説。4290円

心理支援における 社会正義アプローチ

不公正の維持装置とならないために

和田香織・杉原保史・井出智博・蔵岡智子 編
個人の問題を文化・社会・経済面から捉える社会
正義(ソーシャル・ジャスティス)。この考え方を
心理臨床にどう活かすのかを問う。3300円

心理尺度構成の方法

基礎から実践まで

小塩真司 編 心理学、教育・臨床現場、
マーケティングなどで活用される心理尺
度の構成に関する基礎から実践まで、検
討すべきポイントを丁寧に解説。3850円

誠信書房 Tel 03-3946-5666
SEISHIN SHOBO 東京都文京区大塚 3-20-6

ロックと



悪魔

われわれの前に
立っているのは
歌手か？ 悪魔か？
それとも

●黒木朋興 2750円
ブラック・サバスにスレイ
ヤー……ヴェノム、メタリ
カ、聖飢魔II。なぜいつも
「悪魔」がいるのか。政治・
社会・宗教から考察する。

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6 (税込)
☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

モヤモヤする正義

—感情と理性の公共哲学

感情に流されない問題解決を試みる

キャンセル・カルチャー、マイクロアグレッション、トーン
ポリシング、弱者男性論……。意見が対立するさまざまな問
題について、どの意見が正しいのか、社会の規範はどうあ
るべきなのか、その「答え」を提示する政治哲学的論考。
ベンジャミン・クリッツァー 2860円

晶文社 〒101-0051 千代田区神田神保町1-11
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

オタク文化とフェミニズム

田中東子

喜劇と苦しさが入り混じるその実践をすくい取りながら、
「推し活」社会の現在地を描きます。「推し活」論の決定版。

2420円

「ふううのLGBT」像に抗して

森山至貴

「なじめなき」「なじんたうもり」から考える

「ゲイコミュニティ」になじめないという立場から見えてくる、
上辺だけのセクシテルマイノリティ理解を脱するための処方箋。

2200円

ロボット倫理学

マーク・クワケルバーク

コンパニオンロボットから軍事用ドローンまで、様々なロボット技術を
考察し、それらがもたらす倫理的問題点を明らかにする。

2200円

青土社 東京神田神保町 ☎03-3294-7829
http://www.seidosha.co.jp/ (価格税込)

言語学 バーリ・トワード

Round 2
言語版SASUKEに挑む



川添 愛 [著]

ことばの「なぜ?」に向
き合う、爆笑必至エッ
セイ! 迷わず読めよ、
読めばわかるさ

1,870円(税込)

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<https://www.utp.or.jp/>

創元社

ホモ・サピエンス 再発見

科学が書き換えた
人類の進化

P・ペティット [著] 篠田謙一 [監訳]

A5判変型・上製・三七六頁

定価5280円

武井摩利 [訳]

遺伝学の進歩が人類進化の理解をどう変えたかを
探り、ホモ・サピエンスの進化と適応の過程を考古
学的証拠から解明する。

大阪市中央区淡路町4-3-6 <税込>

TEL06-6231-9010 Fax06-6233-3111
千代田区神田神保町1-2 TEL03-6811-0662

別冊太陽 日本のころ 319
大河ドラマ「べらぼう」で話
題沸騰!! ドラマの考証を
務める監修者による、葛重
をビジュアルでたどる決定
版。吉原に生まれ、歌麿、写
楽を見出し、ベストセラーを
連発した生涯とは。

葛屋重三郎

時代を変えた
江戸の本屋

鈴木俊幸 監修



A4変型判 / 160頁
定価2530円(10%税込)

平凡社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29
tel 03-3230-6573 fax 03-3230-6587
<https://www.heibonsha.co.jp/>

2024年新書の話題作!

歴史学は こう考える

松沢裕作

史料とは何か? 解釈が複数になるのはなぜ?
安易な議論に振り回されないために、歴史家
が築いてきたこれらの理屈を学べば、歴史の
解像度ももっとあがる。
「類書がない!」と騒然の歴史入門書。

ちくま新書 定価1034円 ※電子書籍も配信中

筑摩書房

営業部 03-5687-2680

*定価は10%税込です。

<https://www.chikumashobo.co.jp/>

2024年12月25日発行 年3回発行 第148号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みすず書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

<非売品>